

と淀みなく暗誦した。星巖は始めて莞爾として笑つた、そして始めて洞穴の契りを結んだとのことである。

紅蘭が詩を能くするやうになつたのも此の時からである。其後は星巖が旅行する時は、必ず連れられて行つた。而して女史も夫と共に詩を作つて樂しみとした。然れど、彼女は決して家庭を無視するやうなことをしなかつた。夫が夜更まで讀書や作詩に耽る時は、夫の好む食物を調理して勸めるのが常例としてゐた。

彼女の交友中に菘仙といふ法師があつた、ある時、紅蘭の留守の間に彼女の乗る女性用の乗物を無断借用したことがある、それと知つた紅蘭は酷く憤つて、假令乗物と雖も、女子用の乗物を妄りに男子が使用するとは元々男女の道に辨へぬものであります。男の乗つた後へ女が乗ることは出来ませぬ」と云ふなり、その輿を碎いて、薪にして焚いてしまつたといふ逸話がある。彼女が風雅な優しい女性美の中にも極めて森嚴犯し難い道德を恪守してゐたといふことは此の一事によつてもわかる。

星巖は勤王家であつたので、幕吏の眼にふるれば罪せられるやうな書類も多かつた。彼女は

難を慮つて、星巖の許しを得て、一枚も残さず焼き棄て、しまつた。果せる哉、其後幕吏は踏み込んで家宅搜索をしたが、何の證據となるべき物がなかつた。彼女が良人の身の上を案じ陰にあつて常に細心の注意を怠らなかつたことは萬事此の通りである。星巖も亦妻を愛し、彼女を信頼すること篤く、他の見る目も羨む程であつた。

安政五年星巖は齡七十歳で頓に歿した。後幕府は勤王家中の危険人物を全般に互つて捕縛して投獄したが、星巖死後のことゝて、紅蘭は拘引されて投獄の身となつた。幕吏は星巖在世中の言行を白状せしめて星巖と提携せる危険人物を探し出さうとして、あらゆる手段を用ひて彼女に迫つたが、氣丈なる彼女は何等の答を發しないで「家政の事ならば知つてゐるが、夫の働きについては何事も知らない、假令夫の機密を妻が知つてゐたとしても、これを妻が口外することは如何なることがあつても出来ません」と平然自若、實に男子をして顔色なからしめるやうな確固不拔な態度で答へた。幕吏の者共もなす術がなく、遂、獄中に半歳も投じた。

獄中生活は詩を賦し、歌を作り、精神の高潔を保つて居た。それが爲に出獄後も身體氣力の衰ふるやうなことはなかつたといふ。

彼女は夫星巖のそののやうに、熱烈なる勤王の思想に燃え、男子を凌ぐ氣魄を持つてゐたが、平素家政に忠實なると同時に夫星巖の志を全うせしめることに努めた。女性としての温情は單に夫星巖にばかりでなく、獄舎の窓で、あたりに飛び來れる鳩の群にも慈悲の心動き自分の受ける僅かばかりの食物の中から半分程も時々分ち與へてゐたといふことである。

太田垣蓮月尼

幕末の歌人蓮月尼は最もやさしい、すぐれた、清らかな人格の理想歌人であつた。

鶯の都に出でん中宿に借さばやと思ふ梅さきにけり

ありたちて朝菜あらへば加茂川の岸の柳にうぐひすのなく

何といふやさしい女らしい氣分の歌であらう。

うつばりの煤も心のちりひちも拂ひて清き年のくれかな

うらやまし心のまゝに咲きてとくすがくしくもちる櫻かな

何といふ清いすがくしい氣品のある歌であらう。

宿かさぬ人のつらさを情とておぼろ月夜の花の下よし

山里は松の聲のみきゝなれて風ふかぬ日は淋しかりけり

蓮月の歌には些の街氣がない。何の偽瞞がない、蓮月が歌であるか、歌が蓮月であるか、兩者離すべからざる所に彼女の人格がありくと浮び出てる。

蓮月は法名であつて、俗名は太田垣壽といつた。父は伊勢の藤堂某で、この藤堂氏が江戸からの参勤交替の歸路、伴つて來た愛妾を京都三本木に圍つておいたが、この妾の生んだ子が後年の蓮月であつた。藤堂氏は妻女の手前、妾とこの子を故郷に連れ歸ることも出来なかつたので、知恩院の寺侍たりし太田垣伴左衛門の養女にした。蓮月は美貌麗質を以て生れ、六七歳の頃から歌を詠み、文を書くわざを覚え、劍道、柔道、その他の武藝をも習ひ、音樂の道に最も詳しく、三味線、笛までも巧に吹奏したといふ稀に見る多能なる婦人であつた。その當時祇園新地に半榮といふ藝妓があつた、評判の藝妓であつたが、それを仕込んだ師匠はやがて蓮月

であつたといふのでもこの人の樂才がわかる。それから裁縫にも長じ、圍碁は初段をうち、茶の湯、生花、凡て婦人として心得べき諸藝に長じてゐたことである。八九歳頃から十七八歳頃までに人に教ふるに足る藝が七つも有つてゐたといふ。

蓮月は年二十八歳の時、婿養子を貰ひ受けて長女が生れ、家庭の樂園は永へに開かれんとした矢先、夫重二郎は居ること僅か五年にして文政六年に世を去つた。蓮月の三十三歳の時で、これから世の俗縁を斷ち、剃髮して名を蓮月と改めて、清淨無垢なる歌人生活を送り、遂に明治八年十二月十日病むこと五十餘日、八十五歳を以て病歿した。

蓮月が夫に事へて貞節堅く、父に對して孝心深く、よくその婦徳を全うしたといふことは次の佳話にても之を證することが出来る。

夫重二郎は圍碁が好きで、屢々これに耽つて寺務を怠ることが多いので、養父は之を快からずと思ひ、内々離縁の相談が持ち上つた。その時、壽子(蓮月)は父に對つて言ふやう、「夫重二郎をすでに夫として迎へた以上は夫に如何なることがあつても、自分は生涯夫の傍を離れることは出来ません。さりながら自分は生れて間もなく、藥の上より引き取られて、長年養育せら

れし恩ある養父の仰せに逆ふことも出来ません。それで如何にしても離縁せずばならずと、のたまふならば、是非なくも諦めませう。たゞ夫重二郎との間に設けし娘は夫のかたみに養育すべく、又よしや別居の悲境にあるとも、心は生涯夫の傍を離るまじ」とて泣く／＼決心のほどを語つたといふことである。夫と父に對する態度の、間然する所なきは誠に婦人の綱鑑である。

夫重二郎の死後、剃髮して、益々貞操鐵より堅く、亡夫の靈を弔つた。然れど蓮月が生れながらの天然の美容は剃髮後も衰ふることなく、人目を惹くものがあつて、屢々事に托して尋ね來る浮氣者も少くなかつた。蓮月は非常にこれをうるさく思ひ、わが跡をくらます爲めに度々轉宅した。年々五六回、多い時は八九回も居を移し、常に門を鎖して蓮月留守との貼札をしてゐたといふ。引越は彼女のおきまりであつたから、人呼んで「屋越しの蓮月」といつた。それでも尙ほも慕ひ來る男あるのを思ひ詫びて、重き秤を持ち來りて我が齒にかけ力をこめて引き抜いたとのことである。

尤も最後の住宅は西加茂の祥光院境内の草庵で、人に知られてよりは訪問客ひきも切らず、中には諸侯あり、歌人あり、儒者あり、茶人あり、蓮月も随分閉口した様子であつた。

蓮月は平生は謙讓にして他人と決して争ふことなく、又我が持ち前の技倆を特に現はさうともしなかつたが、或年の秋、清水寺に遊山に出かける途中、若い酔ひどれの一群に逢ひ、蓮月の一行に戯れかゝつて、いよく亂暴に及ぼしたので、彼女もこらへかねて、一人の荒者を二三間投退けて、この亂暴者の虎口を逃れたとのことである。一見やさしみとしたりやかさの女性の内にも又内心密かに男子を壓する性格のあつたことは、實に日本女性の典型として、奥ゆかしさを感じるるのである。

彼女は、三十三歳から五十代まで尼生涯で終つたが、元より尼となつても貧しき身のことゝて、生業の爲めに陶器製造の事を覚えて、急須や茶碗を作つて、それに自作の歌を焼きつけて賣り出したが、これが案外の評判となり、又世人の人氣を呼ぶものとなつた。今日に至るまで、尙ほ蓮月焼と稱して名高き焼物となつてゐる。

斯の如く、蓮月尼が日本女性的典型の美德と逸話の數々を残す中にて、又最も世人の敬慕して止まないことは、實に佛陀の道に精進してゐる點であらう。攘夷熱の熾なりし折、外國人を決して排斥せず、同情寛仁の法を示してゐたことは當時彼の詠歌の

あだ味方勝つも負くるも哀れなり

同じみくにの人と思へば

の中にもよく味ひ得ることが出来る。

彼女の美はしき佛心は常に奉仕的生涯となつて現はれてゐる。京都丸太町の橋を架けたり、西加茂の子供達に着物を恵んだり、物あればこれを布施して、世の惱める人々を救ひ、或は、女子供に諸藝等を教へて倦まず自ら誇ることなく常に謙遜して禮に篤きこと又後世婦人の龜鑑とすべきことである。

彼女は死ぬ時まで、しつかりした覺悟があつたと見えて、その臨終の際には親しき人々を枕邊に招いて「妾亡き後湯灌をして下さるに、必ず男子の手を用ひぬ様に」と申し残されたさうである。

若き頃自らの齒を折つた心持はこの時まで猶美しく残つてゐた。

靜寛院和宮

文久元年十一月十五日、中山道から江戸に御着遊ばされた和宮親子内親王は、天下の和平の爲めに、その大いなる御心によつて、將軍家へ御降嫁の決意をなされた。

その頃、徳川幕府の威信は全く地に陥ちて、諸國には勤王の志士起り、倒幕と攘夷の聲は巷に滿ちて、幕府は累卵の危きにおかれた。

こゝに於て、此の窮狀を脱して、幕府の基を安らかにする方法が幕府重臣間に議せられた。その結果、公武の合體を最も必要とし、皇室と、幕府が不斷の關係を緊密にして、尊王の志士の怒りを鎮めていくことが時宜に適した最上策であるといふことに一決した。

そこで、孝明天皇の皇妹和宮の御降嫁を、九條關白を経て言上した。無論この縁談は容易に纏る筈はない。最も、天皇御自らこれに御譚意なさらず、殊に尊王攘夷論者の如きは激越なる言辭を以てこれに反對する者も多く、和宮も當時、東の國へ御降嫁なされることを痛く嫌はれてゐた。

然れど、幕府では、あらゆる手段を講じて、熱心に懇望し、勅許を願ひ出た爲め、畏くも孝明天皇は治國和平の大道を御專念遊ばされてつひ、九條關白の懇請を御許容し奉ることとなつた。然れど、和宮は尙ほこの婚儀を固辭せられたので、天皇は止むなく、當時、御年僅か二歳にてあらせられた壽萬の宮皇女をして、和宮に代へて天下の和平を御圖りなさらうとの聖慮の程を、九條關白に御内示遊ばされたのである。この事を聞かれた和宮は實に恐懼なされて、此の際皇國の爲めに、我が身を犠牲にしても御降嫁の趣き御申出された。

茲に於て、文久二年二月十一日、和宮は御年十七歳にして、將軍家茂と御婚儀の典を擧げさせられた。

當時、夷族と呼ばれてゐた徳川家へ御降嫁遊ばされた和宮の御心の中は如何ばかりであられたか實に拜察するだに恐れ多い極みである。然れど、宮は御降嫁後は日本女性としての確固たる信念を以て婦道を守り、決して御心惑ふことなく、將軍家茂によく仕へ奉り、御夫婦の間柄はいいとも睦しく、床しき限りであつた。

將軍家茂は宮の二十歳の時上洛し、長州征伐を決行したが、偶々病に犯され大阪城に於て薨

去した。その時の和宮の御歌に

三つ瀬川世のしがらみのなかりせば

君もろ共に渡らましものを

世の中の憂きてふ憂きを身一つに

取り集めたる心地こそすれ

の御詠が残されてゐるが、この御歌によつて宮の將軍家茂に捧けられた美はしき御心情を拜すると共に、如何に日夜御惱ましき日を送られてたかといふことも拜し奉られるのである。

宮は夫家茂の遺骸を、その年の十月二十三日に増上寺へ葬り、十二月十九日に縁の御髪を切らせ給ひ、靜寛院宮と稱せられて、ひたすら、夫將軍の靈を祈り、生涯、故人に嫁くことに御決心遊ばされたのである。

時に、天下の尊王倒幕の志士は、いよく熾烈を極めて、明治元年(慶應四年)、時勢は急轉

直下して、十五代將軍徳川慶喜の大政奉還となつたが、慶喜は巖に烏羽伏見の戦によつて賊名を負ふて江戸へ歸還した。そこで、慶喜討伐の官軍は箱根の嶮を越え、江戸攻略の策をとるところになつたが、一度、此の報が傳はると、宮は非常に御心配遊ばされて、直ちに慶喜に逢つた上、朝廷に哀訴することになつた。

朝廷方にありては、この宮の健氣な御熱誠こむる御働きに心動かされ、岩倉公を初め、重臣達が相計つて徳川氏の家名だけは斷絶しないやうにとの勅許を俟つことが出來た。そこで宮はこの有難い思召に對して、徳川家の家臣共にも堅く輕擧を戒しめられ、慶喜は上野寛永寺に謹慎の身となり、賊名を負ふたその罪を待つことにした。そして、又宮には土御門藤子をして沼津へ遣はし、官軍の江戸進撃の中止について歎願書を届けさせ給ひ、更に、老女玉島を岩倉公に使用して慶喜の恭順の實情を詳かに述べさせられて、官軍進撃の停止を求められた。

斯の如く、宮には御心を碎かれて、陰になり、陽になつて、婚家徳川氏の爲めに御盡しになり、江戸百萬市民の戦禍を免かれしめ給ひし御働きぶりは、實に男子も及ばぬ壯烈な振舞で常に大局に立たれて事を斷ずる御賢明の然らしめたところである。

三月十四日、勝と西郷の會見の結果、つひ、江戸八百八町は戰禍の巷から脱して、百萬市民の身命財産の保全を得ることを得たのである。

この時、宮には御年僅かに二十三歳であらせられた。是れ實に、恐れ多きことながら、竹の園生の貴き御身を以てかゝる大業をなし得たことは我が國有史以來、稀に見る女性の輝きであらう。

宮には明治十年御病にかゝり、相州塔の澤に轉地療養中、天命亦如何ともなし難く、遂に、その年の九月二日に、三十二歳の芳香未だ消え失せぬ若さを以て、その地にて薨去遊ばされた。

村岡矩子

近衛家は輔弼の臣として累代の名家である。近衛忠熙公の母君は尾張大納言徳川宗睦の女であるから、徳川家とは最も縁故のある身であるにも拘らず、公は熱心に勤王討幕の運動にたづさはつた。而して幕府の専政を憤り、水戸の鶴飼吉左衛門を助けて密詔を水戸に下したり、或

は安政の大獄が起りかけて天下の勤王の志士を捕へて投獄しやうとした時、清水寺の僕僧月照を我が邸内に隠しなどして國事の爲めに奮闘されたことは、公の事蹟として著れてゐるが、その背後には常に老女村岡といふ烈女の活躍してゐたことを見逃してはならない。

村岡は本名は津崎矩子といつて近衛家の老女であつたが、勤王の志篤く、殊に嘉永、安政の頃、天下は鼎の湧くが如く騒がしかつた世に在つて、身を以て國恩に報いやうとの念に燃えてゐた。近衛公が密詔を水戸に傳へられた時も、又月照を邸内に隠した時も、彼女が其の間に立つて盡力したのである。幕府は村岡老女が志士の間に活躍するを惡んで、これを獄に投じた。獄吏は暴威を振つて嚇して詰問した。彼女はこれに對して却つて嘲笑して「あなた方は若し私に御訊ねがあるなら、おとなしくお訊ね遊ばせ、怒つたところで致方は御座いません」と云つたから獄吏共は急に優しい言葉で近衛公の事などを訊問するやうになつた。

然し彼女は近衛公の事に及ぶと、屹となつて「そんなことは私どもの口から言ふべきことでは御座いません。又あなた方の御訊ねなされるべきことでもないと思ひます」と頑として一言の答へもしない。それで役人も致方なく、遂に彼女を江戸へ護送することに決した。

此の時、近衛公は恰も我が片腕を失ひたる如く悲しみ歎かれた。見送りに際し、

すさまじく荒るゝあづまの空さして

ゆく先いかにならむとすらむ

一すぢの道のまことをしるべにて

あづまの山もやすく越ゆらぬ

との歌を詠まれた。此の時、村岡老女は既に心に決したるものゝ如く悲しむ色もなく神色自若として彼等に引かるゝまゝに江戸へ下つた。

江戸に禁錮されること約三十日、獄吏の拷問は初めの如くであつたが彼女は口を緘して述べない。終に出獄を許されて京都に歸ることになつた。これよりは近衛公に仕へず嵯峨の奥に閑居して直指庵と稱して隱退し、風月を吟じて晩年は風雅の生活を送つてゐたが、野村望東尼が懇々彼女を訪づれて來ても逢はなかつたといふのはこの頃である。

間もなく王政復古の快舉があつて、勤王志士の望みは達せられ、彼女は「朝廷の御威徳の輝く御代を壽ぎ奉りて最早や死んでも残り惜しいことはございません」と申してゐたが、明治五年に至つて、彼女の生涯を通じ米を二十石づゝ賜ることになり、その當時、

思ひきやかずならぬ身のかくまでに

ふかき恵みの露かゝるとは

と詠じて天恩の忝さに感泣した。

志操堅く氣象壯烈なる彼女も天壽には抗し難く、明治六年八月二十三日齡八十八歳を以て長逝した。

畏も、明治二十四年十二月十七日特旨を以て従四位を贈られた。

野村望東尼

維新改革の大業は男子のみの事業ではなかつた。その隠れた國史の裏面には矢張り婦人の力

が與つて大きかつたことである。

歴史上にその名の現はれてゐる女性の中には近衛家の老女村岡、梁川星巖の妻紅蘭、或は蓮月尼等幾多の貞婦烈女があつた。その中でも又野村望東尼の如きは傑出せる女性といはねばならぬ。彼女は文化三年九月六日福岡城下に生れた。父は浦野重右衛門といひ、母はみち子といつて望東尼はその三女であつた。浦野家は黒田家に仕へて勳功を建て武門の譽高く、彼女は實に理想的日本武士の家に生れて、武士道の精神を以て育てられた。早くから裁縫、刺繡、機織の如き技藝に長じ、殊に割烹、料理などは得意としたところで、自ら野村流といふ一流を創めたほどであつた。

彼女は二十四歳の時、野村新三郎といふ筑前藩士の後妻として嫁した。

そして彼女は一家の主婦として三子の繼母となつて頗る骨折つた。然れど寛政その宜敷を得た躰け方によつて長男貞則は後に筑前藩の目附役に擢んでられ、又貞則の子の助作は國事に骨折り、後に正五位を贈られ、護國の神として靖國神社に祀られてゐる。

彼女は家庭に於ける凡ゆる雜務に追はれながらも豫ねて嗜みの和歌や繪畫、書道、挿花、點

茶、刺繡等何れもその蘊奥を極め、殊に和歌と書は最も優れて、和歌の如きは平安時代の歌に比べても左程劣らないといふ評判に達した。二十七歳の時、大隈言道の門に入り和歌を學んだが、その當時師言道も彼女に「おのれ教へ子あまたなれど、亦類あることなし」といつて推賞してゐる。

弘化二年十月夫新三郎は家を長子に譲り、望東尼と共に福岡の山莊に隱居した。元來彼女の

夫新三郎は單に文藻あるばかりでなく、勤王家であつたが、安政六年六十六歳で逝いた。寡婦となつた彼女は、文久元年に上京して皇居を拜し、尙ほ師大隈言道に見えた。その途中兵庫湊川の楠公の墓を詣で、

かしこしとぬかづくうちも我が袖の

みなと川水せきぞかねける

の一首を残してゐる。彼女はこの旅行中に一人の友人を求めた。即ち彼の馬場文英である。彼女は文英の盡力で近衛公に拜調しやうとしたが、公は幕府の忌諱に觸れて暫居謹慎の身であつ

たから、つひに目的を果さなかつた。且つ又近衛家の老女村岡も嵯峨野の大覺寺に蟄居してゐたのでそれを訪ねたが、村岡も左の歌を詠じて面會を斷つた。

はるばると訪ねし君が恵みをも

しづ心なくあはで苦しき

村岡は若しこゝで彼女に面會したならば、主君の近衛家を煩はすことになりはしないかと憚つたためである。それで望東尼も無理に面會を強要することなくして次の返歌を與へてゐる。

雲井にも君が名高く聞えけり

慕ひ來る身をあはれとも見よ

斯くて彼女は上方に滞在してゐるが、故郷の家族や、友人は心配してこれと呼び歸へした。この旅行は彼女に一轉機を與へてゐる。

旅行から歸つて來て後は、彼女の平尾山莊は宛ら志士の集合所の觀があつた。然れど、筑前

の勤王派の勢力は殆んど佐幕派のために一掃されんとしてゐる。彼女の教へ子である中村圓太等も獄に投ぜられ、彼女の心配は容易でなかつた。吉田松陰の門人中傑出してゐた高杉晋作も中村圓太の斡旋で一時はその山莊に潜伏したことがある。その頃西郷隆盛も福岡に來てゐた。その時福岡の志士共は、西郷と高杉を會見せしめやうと盡力したが、高杉はこれを拒まうとした。そこで望東尼は次の如き歌を書いて示した。

紅の大和心はいろ／＼の

絲まじへねば綾は織られず

武夫の大和心をよりあはせ

すゑ一すぢの大繩とせよ

この歌を見て遺の強情な高杉も悟るところがあつて遂に西郷と會見した。

この一事を見ても彼女が如何に薩長の偉大な人物の調和に努力してゐたことを想像し得るで

あらう。

勤王黨の志士が各自私情を捨て、大義に合せねば目的は達しられないといふことが彼女の着眼であつた。彼女と高杉との交りも追々深くなり、高杉は單に長州出身の志士たるに止まらず、日本に於ける有數の人傑となつた。

彼は二十九歳で逝いたが、彼の業績は實に大なるものがあつた。彼女が嘗て反對黨の爲めに玄海灘の一孤島、姫島に流されたことがあつたが、この孤島に於ける彼女の生活は姫島日記にもよく語られてゐる如く、烈女の面影を偲ぶことが出来る。彼女はこの孤島に流される際に、般若波羅密多心經を血書してそれを刑に處せられた志士の遺族に送つた。そしてその心經の中

おくれゐてかくも甲斐なし法の文

よみがへりこむつてならなくに

にと書いた。今日尙ほこの血書は残つてゐる。

高杉は遂に謀を以て彼女をこの孤島から奪ひ出した。その後高杉が慶應三年二十九歳で病死

してから彼女も山口へ引き取られ、薩長の間を奔走して、兩方の聯合に盡力した。愈々勤王討幕の聯合軍が出来て、上方指して進軍し、彼女も三田尻へ赴き、その翌日から一週間宮市の天満宮に参籠し、斷食して勤王軍の幸福を祈願した。

これが爲めに體を弱くし、病氣の因となつて慶應三年十一月三田尻で逝いた。享年六十二歳であつた。

彼女は實に己れを捨て、人の爲めに盡し、或は國家に盡した幕末に於ける日本女性の特色を最もよく發揮した一人である。而して日本女性の爲めに萬丈の氣焰を吐いたものといふべきである。

望東尼の和歌には愛國至誠の面目を現したものが多し。紀貫之は「つよからぬは女の歌なるべし」と言つてゐるが、望東尼の歌は全くこの言を裏切つて、實に力強い大精神が籠つて、彼女の性格を如實に表現してゐるやうである。茲に尙ほ數首を擧げて彼女の面影を偲ぶことにしよう。

中々に消えなむのちぞ我君の

みかげにそひて守りまつらむ

うら清き心つくしのかひあらば

魂はきゆとも何かいとほむ

うつせみの身はくたしても皇國を

思ひ凝りたる魂は朽ちせじ

梅の花さくまも待たで散らむ身の

こゝろさし枝を手折こしかな

武士の弓矢にかへて石火矢

うちかはりゆく世の響かな

老ぬとて鳥に蟲にもならねども

うれし時はなくばかりにて

とにかくに年経ばとのみたのみつる

昔もいまもおなじ我身か

佐久間象山の母

文化八年、信濃の國の象山の麓に呱呱の聲を擧げた佐久間象山は、父國善に就いて學問を勵み、十五歳に達する頃には既に易經を全部暗誦するに至れる程の學才を發揮した。併しこの神童、この天才兒の背後には、彼をして自由にその才能を伸し、よく涵養し得た賢母のかくれた功德を思はねばならない。

天保十二年二月十二日、象山は故郷を後に江戸へ遊學することになった。その門出の際象山

の母は、村外まで象山を見送つて、愈々別れる時に「お前はこれから遙々江戸へ出て學問を勉強しやうとするが、先づ以て篤實にして正道に就き、一生懸命勉強しなくてはならない。そして自分の體に自ら徳のつくやうに勵んで下さい。若しお前が、この母の教を守らず、志も何も普通の人と何等異るところがないやうでしたら、この母は少しも嬉しいとは思はない。それでお前が、この母の言葉に背くやうなら、もう母を思はないでくれよ。私もお前を子とは思ひません」と容を正して諄々と諭した。象山はこれを聞いて、涙を流して喜び、且つ母の教へに背かないことを固く誓つて出發した。

江戸に入ると直ぐ、當時學者として有名な林述齋、佐藤一齋の二門に出入して學を研ぎ、梁川星巖や渡邊華山などゝ交つて、只管成業の日を楽しんだ。そしてその間に胸裡に刻みつけられた母の訓言を片時も忘れることなく心に念じては一層篤實にと自奮勉勵した。

學成り名遂げて象山の名聲は字内に響き渡り、漢學ばかりでなく、西洋學の研究にも餘念なく、自ら鐵砲の製造をも試み、又鐵砲兵制の知識にも深く、「海防八策」の書は實に象山が國家百年の長計を立て、如何に國防問題に熱心であり、而かも造詣が深かつたかゞ分る。

天保十二年、藩主幸貫に擧げられて、象山は海防の顧問となつたが、藩主病氣のため閣老の職を辭したので、象山も同時に職を去り、直に故郷信州に歸つた。時に病床に臥したる母の喜び、愈々初志を貫徹して錦を故山に飾る我が子の姿を見ては、病を忘れて、いそぐと床から起き出で、出迎へた。象山も母の満悦の姿を見ると、涙を流して喜び合つた。象山の日夜寢食を忘れての看病、その甲斐空しからず、その後數日にして母の病も全快したので、象山は母を伴つて再び江戸へ出た。その中に象山の名聲を傳へ聞いて教へを乞ふ者日に多く、その様を見て、母は自分の訓言を能く守つて正道に就き一世の學者となつた象山の純孝至誠、彼の人のなりを心ひそかに喜んだ。

その後國防、阪港通商等に關し東奔西走、眞に國士として大局に着眼し、維新大業の礎をなしたその功績は實に我が國史上に赫々たる譽を残すに至つた。これ眞に彼が年少の折、母の教訓をよく守り、母の感化の然らしめた賜物である。「この母にして、この子ある」所以は、象山と彼の母に於ても見ることが出来る。

吉田松陰の母

親思ふ心にまさる親心

けふのおとづれ何ときくらん

安政六年十月二十七日、彼の幕末の偉人吉田松陰が斬罪に處せらるゝに當つて詠めるこの辭世の歌は、永遠に人の子の胸に、悲痛な響きを與へることであらう。如何に死を怖れぬ英傑松陰も、流石に親を思ふ心は、慘として涙なきを得なかつたと見える。この偉人を生める母瀧子は、男勝りの典型的婦人として世に傳つてゐる。

彼女が兒玉氏から松陰の父、杉百合之助に嫁いで來た頃は、杉家は極めて貧しく、薪すら買へない程で、瀧子は近くの山に枯木拾ひに行つた位であつた。然れど瀧子は朝夕、三人の子供の養育の傍ら、能く姑に孝養を盡し、貧苦の内にあつても、少しの苦痛の色を面に現さず、殊に姑の妹なる岸田氏が、貧しく、病に冒されて杉家を頼つて來た時などは、瀧子は我が事や

うに看護し、種々面倒を見てやつたので、姑は泣いてその恩誼を謝したといふことである。

松陰が松下村塾を開き、後身の子弟の教育につとめた時は、母瀧子は、子弟達を厚く遇し、同志の者など訪れて來た時は、酒饌を供して快く歡待して、常に變らぬ態度を以て接した。

それで當時の志士のうちには瀧子の恩誼に泣かされた者も多かつた。

松陰が死罪に處せられ、その禍は延いて父百合之助に及んだ時なども、既にこの事あるを覺悟してゐた瀧子は、少しも周章せず、家事萬端の事を處理した。又前原一誠の亂の時にも、孫小太郎とその弟玉木文之進など戦死しても、瀧子は毅然として措置を誤らなかつたので、益々賢婦人の名聲は世にあらはれ、朝野の人々の慰問が絶えなかつた。

明治二十三年八月二十九日彼女は年八十四歳にして逝いたが、死に先だつ十日程前に、松下村塾再興の修築が成り、上棟式を行つた時には、病床にある老いの身の苦痛をも忍んで、病を押して輿に乗り、その式に列するに至つた。而して又夜の宴會にも列席して、往時、松陰の子弟を教育したる様を追想して滿悦されたとのことである。

畏くも昭憲皇太后陛下には、瀧子の死を聞き召され、金百兩を恩賜せられてその靈を御弔ひ

遊ばされたと承る。

「貧すれば鈍す」とは凡人の例であるが、松陰の母瀧子は貧困の裡にあつても、少しの氣まづい思ひを面に表はさず、晝間の野良稼ぎの疲れも癒えぬ間に、夜は近隣の童子を集めて手習など教へて夫を扶け、家計を手傳ひ、時に又病床に臥して不自由な親戚の者まで助けて、家人も及ばぬ懇切ぶりに感涙を催さしめた程であるから、これによつて見ても彼女が尋常一様の婦人でないことがわかる。

乃木大將の母

長州毛利家の家臣に乃木十郎希次といふ侍があつた。騎射の業にかけては、藩中に並ぶものもないほどであつた。しかも清廉至純、藩士の畏敬の標となつてゐたが、その剛直さが却て家老等の反感を買ひ、その讒に會つて百五十日の謹慎を命ぜられたことがある。それがために歸國後は、暫く無役でゐたが、元々忠誠な人であつただけに、後又拔んでられて、若君宗五郎の傳役として長府から一里餘りの勝山の居館に日毎通勤するやうになつた。この忠誠至純、而か

も剛直なる十郎こそ、軍神と謳はれ、大和魂の權化と稱へられて、我が國の歴史に永劫不滅の光輝を添へた乃木將軍の父である。

若殿宗五郎は兎角我儘の負け嫌ひな人で、武術の稽古などにも、師範役などが手酷く打ち込まれるのを厭がり、年下の弱い者とばかり立ち會つてゐた。或日のこと、若殿が道場に来て、生徒の顔を順々に見渡してゐたが、その時隅に小さくなつてゐる一人の生徒、その頃藩の人達から幼名「無人」を「泣人」と嘲けられてゐた十郎の倅、後の希典を見ると、この男となら勝つてあらうと思つたものか、「無人を相手に致してやらう」といひ出した。無人は父の命に従つて若殿の相手になつた。その時、無人の力こめた諸手突が、強く若殿の咽喉を突きあけてその途端若殿は「うむ」と呻つて後に倒れた。

無人は双手をついてあやまつたが、若殿散々に不機嫌で立腹の様子である。無人は急用があるとして悄然と我が家へ立ち歸つた。

彼の家は當時食祿僅か八十石で、至つて佻しい生活であつた。六疊、四疊、二疊の狭い、疊は破れ、戸は外れても繕ふ費用さえない程の家計であつた。彼が道場から歸つて來た時には、

十歳になる弟眞人と妹のお稻、お留が母から授けられた内職の仕事をしてゐたが、母壽子の姿は見えない、眞人は小さい聲で「お母様は町の質屋へいらつしやいました」と兄無人に語つてゐるほどに言葉にも盡せない窮乏であつた。

無人は、今日の立ち合ひに若殿を散々に打ち据ゑ、その上道具外を突いて倒したのであつたから、いづれお咎めは免れないであらう。さうなると父にまで累を及ぼすこととなる。これは子供として忍び難い不孝、いつそ潔く割腹して責めを一身に負ふべきであると、一途に決心の臍を固めた。それには母上が歸つて來ない内がよいと思つて、無人は弟妹に向ひ「お母様のお歸りが遅いやうだ。お前達これから町へお迎へに行つて來てくれ」と斯ういつて弟妹を一時出して、隙をつくらうとしたが、蟲が知らせたものか、三人とも遊つて出て行かうとしない。無人は語氣荒々しく「兄の命令ですぞ、早く行きなさい」と叱りつけたので、長上の命には何事も逆らはなかつた弟妹達は、何となく後髪でも引かれるやうな思ひをしながら、悄悄と家を出た。その痛ましい後姿を見送つた無人は、溢れ出づる涙を拭きながら、机に向ひ、遺書を認めて、机上にこれをおき、自分は愛用の脇差を取りて、今や割腹しやうとするところを、「無

人！何をするのか！」といきなり障子を明けて來た叱咤の聲。「この不孝者が！」母の壽子は脇差を取上げて、ぢつと昂奮した我が子を睨んだ。「愚な子だ、不甲斐ない子だ、お前の父や母は、お前一人を切腹させて黙つて見てゐるやうな人間ではない。切腹さすべきことがあるなら、父なり母なり自らが介錯して腹を切らせる。親子の愛に溺れて切腹さすべきをさせない程不甲斐ない兩親ではない。眞の忠臣は眞の孝子でなくてはならぬ。身にふりかゝつた難苦を、何故父や母に打ち明けないのか。その位のことか判らぬお前でもあるまい」母のこの一言一句は壓するやうに頭上に落ちかゝつて來た。無人も思はず頭が低く垂れ下つて、母壽子の赤心の迸つたその諫めによつて、これまでのやうな唯の無人ではない別人のやうな強い人となつた。實に無人の超人的人格は、この一轉機によつて覺醒の方向が示され、而して、忠孝一本の權化と稱さる軍神乃木の名は國民の心深く滲みて永遠に崇仰の目標となつた。これ實に母壽子の感化薰陶の然らしむるところである。

阿部景器の妻

明治九年、肥後熊本に起つた神風黨はその數僅か百七十餘名であつたが、熊本鎮臺の營内に突入してこれを焼拂ひ、或は主なる武官や文官を殺したり傷けたりして大騒動を起したことがある。その神風黨の中に阿部景器といふ若者があつた。彼の妻イキ子は鳥井喜新大の長女で、イキ子の兄は眞樹といつて後には大阪控訴院判事となつたが兄も亦當時、神風黨の一人であつた。イキ子は十六歳の時に餘儀ない事情があつて熊本市の某氏へ嫁ぐことになつた。イキ子は固よりこの縁談には心から進まなかつたので、生涯の一大事に直面した彼女はきつと心に決するところがあつた。兎に角、結婚の儀式だけは済まして、かねてから色々世話になつてゐる媒人の鳥井家の顔立てをした上、自分の深く思ふところを命にかけても決行しやうと思ひ定めた。愈々舉式當日、その夫たるべき人の家に行つて見ると、聞きしに違はぬ凡庸の男子である。結婚の初夜、彼女は寢室に端坐して衣帯も解かず、夜の明くるを待ち兼ねて家中の人々が眠りの覺めない中、曉に乗じて我が家に馳せ歸つた。

彼女は母の前に手をついて「唯今歸りました」と申して、事の次第を述べた。母も彼女の志に遂ひ、感激して、「最早義理も立ち、顔も立てたることなれば、この上は御身の望に任せよう」として早速離縁を申込んだ。イキ子は後、家に在りて母の手助けをしてゐたが、その理想的の夫を阿部景器に得て、これから身も魂もその夫のために捧げ盡すことゝなつた。

時に神風黨の一味、久留米の鏡山紀伊が彼の家に逃げ來つたので景器は我が家にこの仲間の一人を隠した。やがてその事が判つて景器はつひ、獄に投ぜられることゝなつた。時は夏の眞中であつたが、妻イキ子は朝は食を斷つて夫の出獄を祈り、夕には蚊帳を斥けて板の間に帯も解かずに寝てゐたので、姑はこれを見て、何とか蚊帳の中に入れやうとしたがイキ子は夫のこゝとを思ふ餘り、夫の獄中生活の苦痛を察して、どうしても蚊帳の中に這入らうとしない。姑も覺えず蚊帳の中から手を合せて嫁の殊勝なる心掛に感激して拜んだ。

夫が出獄後家に在つて、或日、獨言を申すには「欲しいものだが金がない」と。イキ子はこれを聞いて「それは又何事にや」と訊ねた。「實は本日市中を散歩したるに或店に恰好の腹巻がある。如何にも欲しいものだつたが存外の高價でどうにも手が出ない。かゝる武具を得たな

らば、いざといふ場合に役立つことであらうに、貧乏の身では致方がない」と具に話した。これを聞いたイキ子は直に我が衣類を賣つて資金を調へ阿部に購はしめた。斯くの如くにしてイキ子は、あらん限りの力を以て夫の爲めに盡して來たが、神風黨は明治九年十月二十日に愈々旗擧げして戰つた。然るに衆寡敵せずして遂に惨敗し、阿部は同志の一人石原某と共に逃れて歸つて來た。直に官軍の捕手は蟻一匹も脱けられぬやうに警戒の網を敷いて搜索した。今はこれまでと覺悟した阿部、石原の兩人は床の正面にかけられた皇太神宮の軸面に恭しく最後の禮拜を捧げて白木の三方に載せた三組の土器で互に御酒を汲み交し、イキ子も隠し持ちたる懐劍を取り出して阿部の傍に端坐した。阿部は之を見て驚き「御身が死んでは母上を如何にせん」と言つたが、イキ子は「不孝の罪は申譯もありませんが、是非御後を追はせて頂きます」と言つて何うしても翻意する様子が見えないので、今更止めることも出来ない。かくて互に相向ひ我と我が咽喉を突き、三人の死骸は見事にその場に横たはつた。時に阿部は三十七歳、イキ子は二十六歳であつた。

世間には、往々にして死を讚美する風潮がある。死ぬることはさほど困難なことではなからう。然れどそれ等の死は發作的、氣まぐれな死であり、發狂者の死であつて、單に厭世的な諦めの死が多い。けれども、主義の爲め、道の爲め、公の爲めに身を亡ぼすことは、凡庸の徒が敢て爲し難いところであるが、彼等が敬神、尊皇、攘夷といふ主義の爲めに潔く自害したといふことは主義の善い悪いは別として實に後世の人をして感激せしめるところが強い、一に彼女が夫の爲めに又主義を同じくする人々と共に最期を飾つたことは誠に見上げたものである。

湯地都尾子

熊本市より二十里程隔てた肥後と薩摩との境に佐敷といふ寒村がある。舊幕時代には細川侯の領地であつた。この地は熊本藩士が藩主の忌憚に觸れて、其祿を減せられ凡そ百年間、此處で佗び仕居する一種の追放の地であつた。

さてこの地に於て既に數代を過してゐる不幸な家に佐々といふ者があつたが、都尾子はこの家に生れ、彼女は十六歳の時に、同じくこの佐敷に追放せられた湯地龍彦といふ士に嫁した。湯地龍彦といふ士は豪傑肌の氣概ある人物であつたが、それが却て禍をなし罪を得てこの地

に送られたのである。それで都尾子の親も、龍彦の人物を見込んで我が女を彼に嫁せしめたが、都尾子亦よく夫に仕へ、姑にもよく仕へて、至極平和な家庭を造つて居た。二十一歳の時に長女千代を生み、二十四歳の時に長男輝狼を生んだ。彼女は如何にもしてこの輝狼を立派に教育して、湯地家を再興させやうと志し、子供の教育には心血を濺いだのである。

輝狼の七歳の時、佐敷に居住してゐる上林といふ儒者の許にて學問をさせることになつたが、先生の家までは一里も隔たり、而かも其間は柴刈る翁や草刈童の外は通はない至つて淋しい山路である。それで都尾子は一家の仕事を済してから輝狼を伴ひ、この山路を辿るのであつた。然し彼女は我が愛子の獨立敢爲の氣象と膽力の養成を思ひ立つて、常にこの山路を辿る時には輝狼を先に立てその後方十間以上も隔て、尾行するやうにして行つた。

ところが或夜、時雨降り、月影小暗く物凄いや夜路を輝狼は「母上さま今夜だけはどうぞ手を曳いて戴きたう存じます」といつて慈母に哀願すると、都尾子は「臆病なことを言ひなされるな、牛若丸はお前の如き子供の時から鞍馬の山奥で劍術を學んだではないか。そんな氣の弱いことでは牛若丸のやうな立派な武士にはなれません」といつて、いつもの通り我が子を先に歩ませ

て尾行をつよけた。母は我が子の健氣な歩きぶりを見て嬉しい氣持の中にも亦何となく愛子を思ふ哀憐の情に打たれるのであつた。そして我が子の前途を思ひながら暗い路をとほくと行く中に、不意にざんぶと高き水音が聞えた。流石の氣丈な都尾子も輝狼が川に陥つたのではないかと大に狼狽して「私が悪かつた。勸忍してくれ」と叫びながら川邊に走りついて闇を透して見ると、愛兒は脇差を抜いて岸に立ち、自若として居る。「母上さま、唯今河瀬を取遁しました」と聞いて、母はホット胸撫で下して喜び、末頼もしきものよと心竊に我が子の健氣な振舞を喜んだ。「それでこそ誠の武士といはれませう。牛若丸にも負けないぞ」と激勵しつつ師の許に辿り着き、其の日の學業を終へて夜更けて我が家に歸つたとのことである。

斯くて輝狼はいつの間にか「大學」の素讀も終り續いて「論語」に移つたが、容易に習得することが出来ない。母は恰も我が事の如く非常に苦慮して嘆いた。

それで彼女は輝狼を先生の家へ送り届けて後、何時も庭の戸を潜り、其の籬の下に立つて、矢立を取り出し、師が聲高らかに讀んで教へるのを一々紙に筆記し、輝狼の覺えにくかつたところには記號を施して置いて、家に歸つた後、母はこれを前に擴げて論語の復習をなさしめたの

で、輝狼の學業も著く進歩した。

斯の如く輝狼は幼兒より身に滲みる慈母の薰陶により一廉の士となることが出来た。

都尾子が貧しき家計の裡にありて、よく夫を扶け。孝養を盡すと共に、子女の教育に斯くも専念した甲斐あつて、輝狼は日を経るに従つて益々文武の道にいそしみ立派な人物となつた。佐敷の里の人は言ふに及ばず、其の譽は普く傳はつて藩主の耳に達した。「我が領内にかゝる賢母孝女のあるのは、全く一藩の名譽である」と言つて湯地家の嗣子を熊本に召還して舊の如く扶持米を支給されるやうになつた。

而して十三年目にして同家は佐敷の地を引拂つて熊本に歸ることとなつたが、同地の人々は別れを惜しみ我が母を失ひたるが如く泣き悲しんだといふ。

後、輝狼は丈右衛門と改名して愈々藩主に仕へることになり、生母都尾子の徳望は日に／＼藩内普く傳はるやうになつた。細川家の家老長岡監物は同藩の名大夫であつたが、都尾子の婦徳に感激して毎年五俵づゝの米を湯地家に贈つて之を表彰した。加之其の別邸に彼女を招き、長岡一家及び家臣の女子達百餘人を集めて、婦人の道を説かしめたり、又自らは都尾子の淑徳

を廣く社會に紹介して女子の模範とすべきものであると推賞して、彼女の徳を普及した。

夫龍彦は天保十三年に不歸の客となつたが、輝狼は父の没後、家督を相續し、藩内に大いに人望を得て、後には時習館の教授に擢用された。又自宅には門弟多く集り常に百人を下らなかつたとのことである。

都尾子は明治十年十二月、年八十二を以て長逝したが、彼女の美德は良妻賢母の鑑として、世の子女の敬仰のまとなつてゐる。亦往々にして愛に溺れ勝な世の母親のため三思に値する美談逸話であらう。

江馬細香

江馬細香は徳川末期に於ける最も教養ある女性として知られてゐる。

彼女の父は江馬蘭齋といつて美濃大垣の醫者であつたが、又蘭學者の一人であり、醫學上に於ける著述、翻譯もあるほどの學者であつた。

細香はその第二子に生れて、繼母に養はれたが、彼女と繼母の間は極めて圓滿であつたことは、彼女が繼母の死んだ時に作つた詩がよくこれを物語つてゐる。彼女は幼少の頃から讀書が好きで、又繪を描くことも好きであつた。父蘭齋は彼女の欲するところに委せ、力めてその志を遂げさせた。彼女はその性質や容貌は、謂ゆる學問的の婦人には珍しく溫雅にして上品であり、氣高く極めて落附ある女らしい女性であつた。

頼山陽は三十二歳の時に京都に上り、三十四歳の時美濃大垣に於て蘭齋と面會した。當時細香は二十七歳であつた。この時山陽と細香は師弟の間柄となり、細香は山陽に師事したが、やがて兩人の間は親密を加へて、互に深く相識るやうになつたが、人事意の如くならずして結婚するまでには到らなかつたのである。

文化十二年山陽三十六歳、細香二十九歳の時、山陽から細香に結婚を促す手紙を送つてゐるが、遂に細香の方で解かれずして、その年山陽はりゑといふ女を娶つたので、彼等兩人の熱烈な情愛に交る關係は、結婚する機會を永久に與へなかつた。併しながらその後、兩人が如何に精神的に相契合してゐたことかは、兩人の間に於ける書翰、詩等によつても十分にこれを察す

ることが出来る。爾來細香は、極めて變化少き生涯に於て美濃から京都に出かけ、山陽に従つて學ぶことを唯一の楽しみとして、山陽も又それを愉快にして待つてゐたのである。

彼女は熱烈なる情愛の持主であつたが、儒教的精神の影響を受けて克己の精神強く、謂ゆる「情に發して禮に止まる」といふ方面の教養高い女性であつた。

山陽と彼女の最後の別れは、天保元年、山陽五十一歳、細香四十四歳の時であつた。その時も彼女は山陽に伴つて嵐山に遊び、或は山陽の鴨川端の家に於て山陽の平家琵琶を聴いた、その歸る時に山陽は、態々彼女を送つて琵琶湖畔の唐崎まで行つた。その時に賦した彼女の詩は「二十年中、七度別る。未だあらず、この別れ尤も説き難きを」とある。また山陽は「此を去つて濃州遠き道に非ず。老來轉思ふ、數逢ひ難きを」と詠つてゐる。かくて彼等は蟲の知らせか、これが遂に一生の別れとなつた。彼女は其の翌年繼母の病死したため京都に赴くことが出来ず、又その翌年は父の病氣のために行けなかつた。而してその年の九月二十三日に山陽は遂に逝いた。しかしながら爾來彼女は未だ曾て山陽を忘れたことがなかつた。

自分が七十歳で血を吐いた時も「唯憐れむ、病狀先師に似たるを」と詠んで山陽のことを追

懐してゐる、かくて彼女は文久元年九月七十五歳で逝いた。

彼女はその交友から愛され、又よく尊敬されてゐた。彼女は婦人として頗る愛國の氣強き愛國者であつた。當時詩文をよくした人は細香以外にも澤山あつた。然れど彼女の如く學問、見識ある女性で、而かも人間の最も苦しい立場に立つて何等行くべき道を踏み外さず、眞直に通り抜けたといふことは最も感すべき點である。

東郷元帥の母

文久二年八月二十一日神奈川附近生麥村に於て、薩摩藩の行列を横切つた英國人を一刀の下に藩士が切り捨てた事件は、忽ち大波瀾を捲き起した。英國では事件を重大視して過大な損害賠償を要求して來たが、仲々埒があかないため、翌年七月二十七日軍艦七隻を以て、薩摩藩を脅かさうと舩艦相觸んで威風堂々と鹿兒島灣に迫つた。

「黒船襲來」の叫びが起ると同時に、さながら蜂の巢を突いた如くに右往左往しながら黒船を眺め悲憤するであつた。

「何の黒船奴が薩摩健兒の腕を見てゐろ」と、傳家の寶刀をぎらりと引き抜いた健兒は今こそ宗藩の爲めに死すべき時來れり。と腕の唸りも抑へ難く、小高き丘に駆け登つた。女子供は喚き合ふ、城下は今や殺氣満ちんとして悲壯な空氣が漲つた。

東洋のネルソンと謳はれ、無比の海將と崇められた東郷元帥は、當時十七歳の青年であつたが、沈着果敢の氣象は早くも郷黨に知れ渡つてゐた。黒船襲來の聲と共に東郷一家は應戰の準備に取りかゝつた。

當時、元帥には四郎兵衛、莊八郎の二人の兄があつたが、何れも父母の嚴格な薫陶と、大西郷の遺風を受けた彼等は、突嗟の間に武裝して凛々しく出陣しやうとした。

慈愛深き母親ます子は「おう支度が出來ましたか」と、我が子の勇ましい姿に見惚れて暫し手にせる勝栗の有無も忘れたやうであつたが、ふと氣附くと、急に晴やかに笑ひ出し「さあこれは御身だちの戰の門出に母が進ぜる勝栗です。これで祝うておくれ」、三人の兄弟は母が情の門出の祝を元氣よく受けた。その時、母は一番年若の平八郎を膝近く呼び寄せ「お前は未だ十七の若者、東郷の忼だといふことを忘れてはなりません。永々恩顧に預る島津家に、こよな

き恩返しの利です。どこまでも勇らしく戦つて初陣の功名を擧げて下さい。卑怯な振舞などして人に笑はれるやうなことがあつてはなりません」と屹然とした容で、懇々といひ聞かせた。後年軍神と稱えられ、日本海大海戦にバルチック艦隊を撃滅した東郷元帥は、青年時代から流石に確乎として冒し難い態度を持つてゐた。母のこの言葉を眉一つ動かさず聞いてゐた彼は静かに手をついて應へた。「お母様、御安心下さい。平八郎、假令死すといへども卑怯な眞似は決して致しません。必ず力の續く限り戦つて彼の黒船を追ひ拂つて参ります」と母を安心させた。この時に下知の早馬が東郷家の門前にひたと止つた。「東郷兄弟は久直公に従つて天保山の砲臺に行かれるやうにとの御命令である」と傳へた。これを聞いた兄弟は、母の前に手をつき、燃ゆるが如き決意の色を浮べて挨拶し、直ちに天保山へと馳せ向つた。

兄弟が去つて約半時間も立つたかと思ふ頃、轟然たる砲聲は城下を震駭させた。東郷兄弟の母は遙か天保山の方を見ながら合掌して心ひそかに念じた。そして義に逸る倅三人の勇ましい働き振りを偲んで嬉し涙が湧いて來た。丁度その時である。遙かに海岸邊りに異様の大音響が起り、黒煙は天に沖して濛々と立ち上り、紅蓮の焰は炎々と、今や鹿兒島城の周圍に這ひ寄

つてゐる。人々は叫びながら逃げ惑うてゐる。彼女は「自分も薩摩藩士の母である」と言ひながら、いきなり臺所の方へ馳せ入り、下女を勵まして大釜で鹿兒島名産の薩摩汁を作つた。而してその大釜を縄で縛り、その上に竹を通して二人の下女に擔がせて、甲斐々々しく砲煙漲る天保山へと急いだ。何といふ雄々しい振舞であらう。如何に勇士の奮戦を期待するも、空腹では働くことは出来ない。温い薩摩汁の一杯でも勧めたら、どんなに全軍の士氣を鼓舞することはあらう。味方を思ひ、子を思ふ彼女の至情は砲煙猛火の中をも物ともせず、甲突川の流れに沿うて砲臺近くの戰場に向つた。

一面修羅の巷と化し、小雨降る中に眞裸體の勇士等が禪一つで甲斐々々しく働いてゐる。その中に勇ましく砲彈運びをしてゐる年少の平八郎の姿を見た老母は嬉しさに胸も迫つて暫く言葉も出なかつた。

砲火の中に、この優しい婦人の眞心こめた薩摩汁、それは疲れ果てた勇士をどんなにか晴やかに生々とさせたことであらう。いちらしい少年平八郎は双眼に涙を浮べながら慈母手製の薩摩汁を食べ初めたが、感極まつて、一杯食べ終るとそのまゝ大地へびたりと兩手を突いて母の

前に頭を垂れた。二人の兄も、並居る薩摩隼人も皆一齊に眼に涙をにぎませながら心から彼女に感謝した。

流石氣丈な彼女も、人情に惹かされて思はず涙にくれたが、直ちに氣を取り直して「皆さんどうぞ勇ましくお働き下さい。又明朝拵へて参ります」と言つて、そのまゝ歸らうとした。

長兄の四郎兵衛は平八郎を呼んで「平八郎、路が暗くて母上も老いの身故、大儀であらう。そこまでお送り申せ」とすゝめられ、平八郎は素裸體のまゝ老母の手を取らうとしたが、母は平八郎の手を軽く拂ひ「今來た路である。私一人で歸れないことはありません。お前は大切な體、戦争といふ重い役目がある。母のことは心配しなくてもよい。早く行つて目覺しく働いて下さい」ときつぱり言ひ放つて、平八郎少年を勵ましなが、一人闇に紛れて歸つた。

何といふ麗はしい母の心であらう。我が身の危険も忘れて砲煙彈雨の中をくゞり、一釜の薩摩汁を勇士に捧げたい一念、しかも子を思ふて愛に溺れず「お前には重い役目がある」との一言を残して歸つた老母の心事は實に氣高い。この母あつてこそ。彼の元帥も現れたことであらう。

元帥が不朽の名將と稱へられ、日本の代表的武人として世界にその名を馳せるに至つたことは蓋し偶然のことではない。

中山美伎

一女性として一宗を開き、今や日本全國より海外にまで信徒を有して、一萬餘の教會と三百萬餘の信徒を數へるに到つた天理教々祖中山美伎の業績は實に日本史上稀有の事實といはねばならない。

彼女は寛政十年四月十八日大和國三昧田村の一農家に生れた。

當時、三昧田村は伊勢國津の藩主藤堂和泉守の領であつたが、この地の舊家に前川半七正信といふ其の地の庄屋を勤めてゐる者があつた。同村の長尾家より娶つた衣子との間に二男三女を擧げたが、この長女が即ち十九世紀宗教界の偉人と絶叫された中山美伎である。

美伎は幼時より聰明で慈悲の心深く、弟妹を愛するばかりでなく、七八歳の頃から農繁の收穫期に村民の多忙の時などは自ら隣家の子供などを遊ばして上げたり、泣く子には自分の貰ひ

受けたお菓子を惜しげもなく頰ち與へて宥めすかす、又自ら拵へた巾着など村の子供に與へて彼等の喜ぶのを見て自ら満足してゐた。七歳から十一歳の頃まで寺小屋に通つて讀書や算術を學び、十二三歳の頃には既に母の針仕事を見習つて大巾木綿を裁つて衣服を縫ひ、自由に機を織ることも出來た。夕餉が終ると母は佛壇の前に坐して阿彌陀經などを讀誦するのが常であつたが、美伎も亦其の膝下にあつて之を聴き、經文を暗記するに至つた。理解力の強い彼女は母より極樂淨土、阿彌陀佛の解釋を請うて之を傾聴するのを唯一の楽しみとしてゐた。十一歳の頃には宗教心に燃え小さき胸の中に淨土宗の堅き信者となり、無常感に打たれて、念佛三昧に日を送り、遂に尼法師たらんことを念願するやうになつたが、美伎の兩親は尼法師になることには反對して許してくれなかつた。

文化七年九月、彼女は十三歳の時、中山家に嫁した。その時は未だ娘分として赴いたのである。良人善兵衛は當時二十三歳で、彼女に世帯一切を任せられたのは十六歳になつてからのことである。幼い時から芽生えてゐた淨土宗への歸依は次第に深まり、遂に淨土宗善福寺に於て五重相傳の傳授を受けた。

文政四年、二十四歳の時に長男善右衛門、同八年に長女政子、同十年二女安子、天保二年に春子、同四年に常子、同八年に小寒子を生み、一男五女の母となつた。その間に彼女の慈悲善行は頗る多く、男子にも勝る野良仕事に従事しながら、人の二日を費す織物を一日に織り上げ木綿類は常に長持に充滿してゐた。之を時に應じて貧困者の救助用に供してゐた。下男下女に對しても頗る寛大で、或日下女のお園が過つて主人の愛玩せる茶器を破壊したことがある。それが爲め家中の者から叱られて、お園は蒼白になつて謝つてゐる。これを見た美伎は傍より「平素、私の躰方が悪いからで御座います。どうぞ私に免じて御勘辨願ひます」といつて自ら責めを負うて詫びるといふ風であつた。

或時、彼女の家の米倉に忍び入つて米を盗み出さうとした者があつた、それが發見されて下男共に捕へられた。見ると同村の某といふ貧しい小作百姓である。下男共は寄つてたかつてこの男を引据ゑて今にも打擲しやうとしてゐる。美伎はその物音に驚いて何事が起つたかと思つて見ると、瘦せ衰へた一人の男、如何にも仔細あり氣な様子をしてゐる。彼女は苛立つて下男等を押し靜め「さう急ぎ立て、手荒な仕打ちに出るものではありません。此方へ連れて參

れ」と勝手口に廻らしめ、色々事情を調べて見るに、その百姓は一家の貧困と、且かも病人を抱えての窮乏を涙ながらに物語つた。彼女は非常に同情して罪を赦した上、多くの食料を與へ、懇ろに戒しめて歸へした。そして其の後姿を見送り、「あれも貧から起つた事である。可哀想だ憐れんでやつてくれ」と下男にも申し聞かして彼等の怒りを宥めたとのことである。

その外、彼女の逸話として残されてゐる數々の中で斯ういふ話が傳つてゐる。

中山家にカノといふ一人の下女が主人善兵衛との間に或る異性間の間違が生じた。美伎は之を耳にし又カノの素振も普通でなく、しかもこの女が良人善兵衛の愛を恃んで大いに増長し、果ては美伎に毒を盛つて殺害しやうとし、同家の主婦にならうと謀んだ。その爲めに美伎は死の苦痛を味はねばならなかつた。然るに彼女は些かも女中のカノを憎む色なく、却つて我が身を省み「これは自分に足りない所があるに違ひない」と己を責め、「若し自分に落度があつたらカノを恨んではいならない。カノの助けを求めて充分夫に満足を與へるやうに努めなければ貞女の道は立たない」と考へ、カノに對して寛大な取扱をなした。

カノは美伎の情愛にほだされ、良心の苛責に堪えかねて遂に、中山家より暇を取つて引き退

り、後大いに後悔して眞人間になつた。而して、永く同家に入出して美伎の恩義に酬ひたといふことである。

又慈悲心の深い無我の現れとも見るべき一事は次の逸話によつて知られる。

それは文政十一年の頃であるが、當時中山家の隣家に乳不足のために極度に衰弱してゐる乳兒があつた。美伎にもその時既に一男二女があつたが、隣家の乳兒を見て非常に氣の毒がり、時々その家へ行つて乳を與へてゐた。そして後にはその乳兒を我が家に引き取つて實子同様に育てた。斯くの如く彼女の慈愛こむる丹精の結果、この乳兒も次第に榮養を増し見違へるほどに發育も良く、生母の喜びも亦一通りでなかつた。然るにその乳兒が俄然發熱して天然痘の症狀を現し再び衰弱して遂に、重患に陥つてしまつた。何分彼の乳兒の親は五人の子に夭折されてゐるので、全く失神せんばかりに心痛してゐる。美伎はこれを見て黙視するに忍びず、如何にもして救助せねばならぬと考へた。それで、先づ自分の子は他人に預け、隣家の子の看病に餘念なく、地方の神社やお寺に参り「我が身と我が子二人の命をも捧げ奉るにより、我が隣家の可憐な照之丞の命を是非御助け給はれ」と祈願を籠めた。彼女の至誠はつひに天に通じたこ

とであらうか、到底恢復の見込みないと諦められてゐた幼兒は忽ち全快した。

ところが美伎の子安と末子の常子はその身替りになつたやうに夭折した。そして又その翌年には長男秀司が不思議な病に冒された。最初は足痛であつたが、長瀧村の中野市兵衛といふ修驗者の祈禱によつて快癒したので不思議な御利益であると喜んでゐると暫く立つて又痛み出して来る。再び彼の修驗者に祈禱を乞ふと直ちに全快するといふ具合で、既に八九回も之れを反復した。ところが、天保九年十月に秀司の足痛が起ると同時に美伎も腰痛の爲め床に就き夫善兵衛も眼病に悩まされ、一家同時に三人の患者を出したので、家中の憂慮は非常なものであつた。

そこで直に修驗者市兵衛に祈禱を依頼することになつたが、加持臺と稱する婦人が不在のため折角の祈禱もその效驗が現れないといふことになつて、彼の婦人に代るべき加持臺となる人をつれて來なければ祈禱も思はしくないといつて困つてゐる時に、彼の行者は神のお告げでもあつたものか、「御家様に御願ひ出來れば申分は御座いませんが」と言ふ。そこで美伎は夫の爲め、子の爲め、又我が爲めであるから早速承諾して加持臺に立つことゝなつた。そして愈々

座が定まると、行者の市兵衛は心膽を碎いて祈禱した。

やがて美伎の身體に異變が起つて眼光炯々としてあたりに放射し「我れは天の將軍である」といとも嚴かに全く別人の如く語り出した。そして尙ほ言を續けて「世界を救はんが爲めに今天降つて美伎の身體も中山家の一切の財産も皆神が貰ひ受ける」といふ神言に満ちた音聲を以て口走つたので一同は之を聞いて平伏した。

彼女はそれから三日三晩一滴の水も飲まず、一粒の米も口にしないで、嚴然として同じ神託を繰返すのであつた。列座の人々は神威に壓せられて一同神命に服する旨を奉答すると、美伎は再び通常の状態に復し、恰も夢より覺めた人のやうに訝かしげに四邊を見廻はしてゐる。夫は之を見て「何うだ、苦しいことはないか」と問ふと「少しも苦しいことは御座いません。胸が清々して氣持よくなりました」と答へたが、これと同時に三人の病の苦痛は何時の間にか去つて急に健康體の氣分に變つた。

其の後も度々神のお告げであるとして色々不思議な現象があつた。或夜、大なる物音に目を醒すと身に非常な重みを感じたが、やがて神憑があつて、國常立命を初め天理教の十柱の神々が

次第に彼女の心に宿つたと説いてゐる。

何か判断等に苦しむ時、美伎に尋ねると、「あゝそれは神様が斯くく〜と仰せになつた」といつて神の答を明白に告げるといふ風で、常に神と相談するが如き、謂はゞ神人契合の境を現してゐた。然れど直に布教には従事せず、其の準備として「世界助けの爲め谷底に落ち切れ」といふ天啓があつたので、これを實現する爲めに、美伎は先づ己の衣類、道具等貴重品を一切惜し氣もなく、貧困な者や、病苦の者等に施した。家人は彼女の仕振を見て驚愕し、これを制止しやうとしたが、「神様の御心で御座いますから、今更、神意に背くことは出来ません。甚だ申譯はございませんが、何卒神の御告げと思召して下さい」といつて、今まで良人に従順であつた彼女は神命の遂行者、實現者として強い女性となつて良人の意見を聞き容れなくなつた。

然し良人善兵衛や家中の者が彼女に逆らへば忽ちにして彼女は重患となり、幾日も絶食を續けるやうになるので、結局善兵衛を初め周囲の人々も神命に服せずにはゐられなかつた。美伎は世の嘲笑にも屈せず、衣類、家具、田畑を追ひ〜賣拂ひ最後には住宅までも賣却して、中山家は今やどん底に陥らうとしてゐる。その時嘉永元年二月夫善兵衛は、六十六歳を以て逝い

た。夫の没後は彼女は長男司秀と五女小寒の三人暮しで、二人の子はよく孝養をつくし細々なから一家を支えていつた。かゝる困窮の中にあつても彼女は貧しい者を見ると我が身の苦しみを忘れて他人に施すことを先にするのが常であつた。

文久三年の頃から初めて美伎を神として崇める者も現れ、熱心な信徒が彼女の許に出入して道の布教に従事した。

疾病の全癒や豫言的中の例は擧げること出来なほど無數に傳へられてゐる。天理教の名は次第に大和地方に擴り、信者の數は日毎に増し、參詣者は絶えないほどであつた。

明治十九年十二月八日の夕刻、美伎は浴室より出る時に、何うした機か、よろ〜とよろめいて、それからいくらか身體に輕微の異狀が起つて、何となく不快の氣持が續いたが、明治二十年二月十八日九十歳の高齡を以て眠るが如く逝いた。

宗教界の天偉人中山美伎の崇高なる人格はかゝる逸事の一端を見てもわかる。

税所敦子

名もゆかしい明治の紫式部とも呼ばれた税所敦子は、本姓を林といひ、文久八年京都鴨川の東にある錦織の里に生れた。幼き時より和歌を好み、十一歳の年に歌道の名手となりたいたと、祈願をこらす程の精進を重ねたので、早くも歌道の奥義を會得することが出来た。

この頃京都第一の歌人千種有功卿は彼女の天分を傳へ聽いて大いに感じ、敦子を召して侍女となし、歌道を教へた。千種卿の門に、鹿兒島の藩士で京都の見聞役を勤めてゐた税所篤之といふ人があつた。篤之は妻に死別して遺兒を郷里に残し、自分獨り上京してゐたが、かねて敦子は篤之の才筆を敬ひ、篤之も亦敦子の才を敬してゐた。これはやがて兩人の心を結びつけた縁の糸ともなつたのであつた。千種卿は敦子が二十歳の時、篤之の後妻になることを勧めたので、かねてから互に人格を心密かに敬し合つてゐた間柄とて喜んで師の勧めに従つた。

やがて敦子は、美しい徳子といふ女兒を擧げて、琴瑟相和し、はたの見る眼も羨ましいほど、楽しい生活を送つてゐたが、かゝる喜びの生活も又餘り長く續かず、夫篤之は敦子が二十

八の初春、肺患の身となつて、病床をはなれることが出来なかつた。それで敦子は日夜帶を解くこともなく心を盡して看護し、神佛に祈願したが、天はつひに敦子の上に幸せずして、篤之は不歸の人となつた。

掌中の玉を奪ひさられた悲しみで、彼女は太陽を失つた暗黒の中に、ひとりの遺兒徳子を抱いて、唯泣き悲しむばかりであつたが、氣丈なる彼女はしつかと我が心を取り直して

限りあるいのちを今はいかにせん

みちびき給へ後の世のやみ

と、夫の冥福を祈りつゝ、亡夫の故國鹿兒島に赴いて、姑に孝養を捧げやうと決心した。

その頃の鹿兒島の風習は同郷の人の外は他所者としてこれを賤しむ風があつた。随つて、税所家の姑の如きも京女なる敦子と同居することを甚だ快しとせなかつた。然れど敦子は決して斯かる風を恐れないで「私は税所篤之の正當の妻であつて、姑はたゞ一人の我が母である。いかばかり嚴しい母であつても、孝養怠りなく努めるならば、必ずや母も亦娘と孫の上に笑ひを

なけてくれるにちがひないと信じて、嘉永六年の初夏、久しく住みなれた京都の山河に別れを惜しみながら、幼児徳子を抱いて南國の鹿兒島さして下つた。

なるほど、夫の生家には、意地の悪い姑がゐる。はるく京都の生地から孝養を捧げたい一念で、夫の故國の土とならうとして下つて來た敦子に對して餘りにも冷く、苛酷であつた。敦子との同居をさへ嫌つて京都へ歸つてくれるやうにと強請され、時には酒を嗜む姑は酔にまかせて打擲の鞭をも屢々加へられた。けれども敦子の心は常に和やかに、聊かの悲しみの色も呪ひの色も見せず、唯一人の母として、我が實母の如き氣持を以て、朝夕よき嫁としての誠を捧げる一方、京都から持ち來つた衣服調度の類は皆、先妻の女に與へて、自分は木綿の粗服をまとひて、嗜の歌道の藝よりは、家政に専らにして、殊に育兒に、まめくしい働きをつゞけた。

彼女の至誠は果して通じた。かたくなな姑をも和けることが出來て、今は敦子をこよなき嫁として杖柱とも頼むやうになり、またとない頼もしい賢婦であると言外に賞讃するやうになつた。

しかしながら、敦子は決して心奢ることなく恭敬の美德を守り、常に表裏なき變らぬ孝養をつくしたので、その徳望は忽ちにして鹿兒島城下に響き互り、やがて藩主島津齊彬公の聴くところとなり、敦子は擢られて藩主公の侍女となつた。而して世嗣哲丸君のために大いに傳育の力をつくした。然るに幼君又夭折したので、傳育の重大責任を感じた敦子は、悲歎のあまり自らして幼君に殉せんとしたが、この急を知つた姑は、敦子にとり繼つて「われいま御身を失はば、何を樂しみとしてこの世に生き残るべき」と泣いて諫められたので敦子もその情にほだされて姑に従つた。握つてゐた懐劍を思はず取り落して、共々に相抱いて暫しの間、涙にかきくられてゐた。その時

親といふしがらみなくば涙川

ありて憂き身を投げましものを

の一首を残してある。

その後は家にありて姑に仕へながら、附近の子女に女藝、和歌の道を教へてゐたが、その頃

同藩の歌人高崎正風等は、彼女の天分を慕ひ來つて、歌談を聞いてゐるが、敦子は男子の訪客ある度毎に必ず一婢を傍に侍させて、決して一人で男子の訪客と談することなく、又正風等の詠草を返す時には必ずその母又はその姉や妹に宛て送り、一度も男子に對して直接に文通するやうなことをしなかつた。斯くの如く彼女は慎ましやかにして、常に世間の誤解を受けることを避けた。

その後、藩主久光公の息女貞子姫が近衛忠房公に嫁した時、敦子は選ばれてその老女となり東上したが、こゝにあつても、多くの者に深く畏敬せられたのである。

明治八年、敦子五十一歳の時、皇后陛下（昭憲皇太后）には、廣く女流の人才を徵せられ給ひ、かねて歌道の御指導に當られた高崎正風は、特に敦子の天分の才と、徳望を賞してこれを宮中にすゝめられたのである。

然るに敦子は島津公の恩義を思ふのあまり、近衛家を去るに忍びずとて再三御辭退申上げ、一には亦我が身に餘る光榮なれども、到底陛下に御相手申す程の域にも達せずとて固辭したのであつたが、正風の心こむる願ひと、大義名分を説かれて、遂に、その命を奉じて宮中に侍る身

となつた。

爾來、兩陛下御文學の諸務を掌り、御製、御歌の拜寫をはじめ、同僚宮女のためにも懇にこれを教示して、日夜恪勤し、安息の暇もないほどであつた。

明治三十三年二月一日是までの精勵の疲れから微恙を感じたので、御許を得て朝を退き、専ら靜養につとめたが、その月の四日午後四時、年七十六歳を以て永眠した。

敦子は幼少の頃より敷島の道を嗜み、風雅な生活の裡に美しい女徳を養つた。そして内に光を包み、溫良恭敬にして、又志操固く、良妻にして貞節、賢母にして克く子女の教養に努め、孝養を怠らなかつた。尙ほ藩公に奉公し、君側に侍して忠勤を勵むといふ風に、終生道の爲めに精進したのである。

彼女の存在は明治の日本女性史に一段の光彩を放つものである。

瓜生岩子

東京で賑かな淺草の觀音堂の左手に寂然として建つ婦人の銅像を見ると、その福々しい顔、

老いたる額の皺も却つて柔和に、如何にも慈悲深いその眼、生けるが如きその容貌は、誰れの目にも先づ尊敬の念を起させることであらう。この銅像こそは東洋のナイチンゲールの譽ある近世稀有の博愛家、瓜生岩子である。

岩子は會津の城下に育ち、九歳の時父を失つてそれから母の實家へ引取られて成長した。幼時より藩の師匠に就いて読み書きを習ひ、又裁縫禮式など女一通りの教育を受けた。

斯くて彼女が十七歳の時、同藩の佐藤茂助といふ者を婚に迎へて、茲に目出度く夫婦の契りが結ばれ、其の家内和合、彼女の貞節は日に／＼目立ち、衆人尊敬の目標となつてゐた。

夫茂助は永年大黒屋といふ呉服店に奉公した正直勤勉の噂の高い人であつたから、結婚後も呉服店を開いて夫婦共稼ぎで家業の繁昌に努めた。

結婚後十一年目に希望に輝くこの一家は不幸に見舞はれ、夫茂助が病床の人となつたので、岩子は三子の養育の傍ら、神佛に念じながら日夜身骨を碎き看護につとめた。然れど彼女が寢食を忘れて看病したその甲斐もなく、終に夫は不歸の人になつた。而かも、その涙の未だ乾かぬ中に三年も過ぎて又母が病死し、重なる不幸に岩子も悲歎に沈み人生の無常を薄むばかりで

あつたが、茲で挫折しては子供の將來に暗い影を投するばかりであると考へ、貧苦の中にも雄々しい男勝りの氣象を以て子女の教育のために盡した。

憂な状でありながらも、岩子は貧に泣く人々や孤兒どもを見捨てる事なく、その悲しい姿を見、憐らしい話を聞けば、屹度何かを恵み與へて、出来るだけの事をしてやつた。大概の者なら、こんな場合は何はさておき、自分のことばかりに夢中になり、他人の難儀など顧る隙もなく、又財物などを恵むやうな餘裕などはないといふのが常であらうのに、其處が後に「瓜生四恩會」といふ會までつくられて、世にその婦徳を喧傳されるやうになつた所以である。

貧しても鈍しない彼女の美しい心は一家の悲歎に疊ることなく、益々同病相憐む慈悲の涙で不運の人々を救つて來た。これ等の人々は恰も岩子を神かと敬ひ、或は親の如く親つてゐた。やがてこのことが又藩主に聞えて、愈々奇特な女であるといふことで、表彰されたこともあつた。

或人が彼女の奇特な行爲を不思議がつて、「あの貧しい苦しい中であつて、而かも女の手一つで四人の子女を養育するさへ容易なことでないのに、如何にして世の貧しい者に恵んだり、世

話をしたりすることが出来るのであらうか」と訊ねると、岩子は「格別に何うといふ理はありません。それは平生の心掛け一つで儉約さえすれば何うにでもなります。人は唯心掛け一つだと思つてゐます。それで困る人を助ける位は兎角出来るもので御座います」と恚う云つて笑つてゐたさうである。この短き詞は實に彼女にしてはじめて言ひ得ることであつて誠に味ふべき教訓であらう。

斯かる間に世上は益々騒がしくなり、彼の明治維新の浪は至る處に響き互つて來た。

會津は常に佐幕黨であるところから、官軍のために散々に攻め破られ、彼の有名な白虎隊の最後を見るやうな非慘な幕も演じられたのであるから、藩中の戦死者は非常なものであつた。中には夫を討たれ、親に離れ、或は子供は路頭に迷ふといふ有様で、食するに困る者も多數生じた。

慈悲深き岩子がこの狀を見て何うして見捨て、おかれやう。早速これ等窮乏の人々を出来るだけ手廣く救ひ、又明治二年に教育の必要を痛感して、心ある人と相談して日新館といふ小さな學校を建てた。而して今までの藩學校の先生であつた人を招いてこの學校の教師に頼み、迷

へる幼童の爲めに讀書、算術の道を教へることを企てた。

ところが、圖らずもこの學校の教師に頼んだ藩學校の先生が、官軍に對つて手酷く敵對したといふことが後になつて知られ、その廉で以て、時の政府から捕縛されさうになつた。

岩子は折角出来上つた學校に教師がなくなつては差當り子供を惑はすものであると考へ、色々思案の末、遂に自分の長男をこの教師の身代りとして縛に就かして服罪せしめることにした。かくて多くの子供達は何時までも有難き師の導きによつて人の道を學ぶことが出来たのである。而して長男は間もなく捕らはれの身となつて東京へ護送された。

かゝる折から、世の中は漸く開けて明治聖代の恩澤は津々浦々までも行互り、新に小學校が設けられるやうになつた。會津にも小學校が開かれたので岩子はこの公立小學校の普及されることを大いに喜び、自分達の計劃した日新館はこれを閉館して生徒は悉く小學校の方へ轉校せしめることにした。

その後又貧困者の子弟を救済する目的からして教育所を建てる必要を感じて、岩子は晝夜奔走して藩内の有志の許を訪ね、讃同を求めたが、容易にその事業は纏りさうでない。然れど岩

子は決して失望の色なく、一度思ひ立つた事は如何なる難事に遭遇するとも飽くまでも貫く精神を以て、先づ小規模ながら自宅に設立する運びに至つた。そして貧しい中から常に貧民を相手にこの教育所の維持のために心血を盡いだ。かくて、彼女の熱烈な慈悲心は社會事業となつて現はれ、貧民救済のために全く身を抛ち、實に涙ぐましい働きを續けた。

明治二十五年彼の有名な磐梯山の噴火の際には、この災厄に罹つた憐れな人々を救助するために働き、それに續いて大洪水の災難に福島地方の饑饉、その惨状は目も當てられぬ程であつたから、岩子は固よりかゝる有様を見て黙つて居られはしない。草鞋穿きになつて甲斐々々しくもこれ等困窮の人達を助けたのは勿論、例の孤兒を悉く救ひ上げて、自分の手許で養育した。此の時、岩子の當惑したことは、これ等澤山の孤兒を養育するに要する資金の缺乏である。彼女は「窮すれば通ず」で、人の棄てゝある飴糶から滋養になる食物を造る法を發明して、この食糧品を製造する方法を多くの人々にも教へ廣めて貧困者を助けた。彼女の心掛けは普通人には解し難いところがあつたので、佛の權化のやうに崇められ、命の親と頼まれてゐた。

かくの如くにして、岩子の名は單に一地方、一故國に止まらず、廣く東京に迄響いたのであ

つた。それで、東京の養育院の懇望があつて、遂に上京することになり、養育院の幹事を勤めることになつた。すると間もなく會津からも懇々使者を立て、岩子の歸郷を促して「かねく貴女の發起になつた教育所を御希望通りに建てる事になつたから、是非歸郷して御盡力を願ひたい」との話であつた。岩子も養育院の方に充分力を入れる心算であつたが、故郷からの申込み、それにかねく自分の發起した事でもあるし、一には又故郷の悲惨な生活に苦しむ人々の身の上を案じて、遂に養育院の方は辭して愈々會津に歸ることになつた。

岩子は其後専ら故郷の育兒會に盡力致し、若松には濟生病院を建て、貧民救済を目的とした慈善事業を起し、又福島にも同じく瓜生會といふ育兒を目的とする事業を起した。

斯くの如く郷里に於いて活躍してゐる中に恰度日清戦争が始つた。岩子は再び東京へ出て貧民救済に志した。此の時も、彼の焼芋屋で捨てた芋の切屑から飴を造る事を發明し、これを貧困者に教へて生計の助けにさせた。

ところが圖らずもこの廢物利用で出來た飴が赤十字社の試験の結果、非常に滋養に富むものであるといふことが判り、直ちに負傷兵の食物に選ばれたので岩子の至誠の奔りはつひ、又軍

部にも及んだ。

斯くて、明治二十九年日清戦役後、更に新領土臺灣に養育院設立を企畫したが、未だその目的を達せずして、翌三十年一月仙臺に赴き其歸途福島に於て心臓病を患ひ、終ひに起つこと能はず、畏くも皇后陛下には御内意を以て御菓子を下賜になられた。この時岩子は重き病の床より離れて端坐し、遙かに都の空を拜し聖恩の優渥なるに感泣したといふことである。

同年四月十九日、年齢六十九歳を以て、更に何等苦痛の様子もなく永き眠りに就いた。その二日前、心に思ふまゝをとて記した遺詠がある。

老いの身のながらざりし命をも

助けたまへる慈悲のふかさよ

一世の慈善家、東洋のナイチンゲールの譽ある岩子の訃音が一度傳はるや、朝野齊しく其の死を惜しみ、彼女の手にて救はれた多數の人々は恰も慈母を失ひたるが如く泣き悲しんだ。

福島市に在る長樂寺に於て、あらゆる階級の人々が集つて盛大な葬儀が行はれた。當時内務

省衛生局長であつた後藤新平の弔詞は最も會衆を感激せしめたとのことである。

明治三十三年、岩子の銅像建設及び瓜生會維持に就て、土方、板垣、吉井、三島、後藤等の夫人達が發起となつて寄附金の募集が企てられ、後に瓜生四恩會と改稱して岩子の遺志を繼いで慈善矯風の事業が起された。岩子の温かな慈悲深き姿は淺草公園内に建立された銅像を仰いでも亦その感を深からしめることであらう。

奥村五百子

愛國婦人會を創立した稀代の社會事業家奥村五百子は弘化二年唐津の高徳寺に呱呱の聲を擧げた。五百子の父了寛は嚴にして慈、怒つては叱咤するが、又小兒も膝下に懐く程の優し味のある人であつた。母は小笠原藩士山田圓太夫の長女で淺子といひ、了寛の二十八歳の時に彼の許に嫁いで來て高徳寺の困難なる財政を整理し、温順貞淑にしてよく夫に仕へ、荒廢其の極に達してゐた高徳寺の再興を完うし得た賢婦人であつた。

五百子は幼少の頃から音曲を好み、五六歳の時、既に琴、三味を習つた。七歳の時に唐津神

社の神官戸川といふ人について讀書や習字を學んだ。

五百子は元來勇壯活潑な性で、恰も男性的で勝氣な女性であつた。

父了寛は五百子に「一心高氣清」の四字を授けて常に教訓してゐたが、又母も彼女の婦道に就いては細心の注意を拂つてゐた。十三歳の頃から裁縫、割烹或は味噌、醬油の製法に至るまで習はしめ、裁縫の如きは最も堪能で、一家中の衣類一切は人手を借りずに仕立て、他人の物まで縫ひ上げるほど上達してゐた。

一方五百子の男性的行爲は年を逐うて盛んなるものがあつた。兄の圓心師と弓を射、又竹刀を揮つて劍道の稽古もして、その道にも相當の心得があつた。

彼女の十七歳の頃は幕末の國事多難の時であつて、鎖國攘夷論沸騰の時代であつたから、父了寛は五百子の氣象を見て、慷慨悲憤の面持で國事を物語ることもあつた。兄圓心も天下の形勢に着眼し、多くの志士と往來してゐたために、五百子も自然其縁にて志士と交り國事を談ずる機會が多かつた。齡十九の時には父の命を受けて長州に行つたこともあつた。この時、五百子は糸經袴に朱鞞の大小を帶び、深編笠を被り、一見壯士の扮装で赴いた。其の時拔身の

槍を携へて海岸を鞏固してゐた長州武士は、之を見て四方より取圍んだが、彼女は少しも恐れ臆する色もなく悠々と笠を脱ぎ捨て、「長門には眞の男子はないと見える。女一人がさほど恐しうござるか」と言つて大笑したさうである。かくして、父の大任を首尾よく果して歸國したが、この戦亂の世に、女子の身を以つて、男子も及ばぬ働きをなし、女丈夫の氣概を示したことはこの一事のみではない。其の後父や兄の命を奉じて遠く京都へ、或は山口、近くは大宰府、博多等へ危き旅を敢行した。

彼女は二十二歳の時に父母の選定によつて、福成寺の大友法忍師の許に嫁することになつたが、不幸にして夫法忍師は五百子が二十五歳の時に入寂し、明治五年に阪田彦五郎といふ志士へ再嫁することになつたが、愛國の至情に燃える彼女は國家に對する主義上よりして、夫と離別し、三子を伴ひて別宅に住することゝなつた。

これより五百子は唐津に住し各種の商賣を營み辛くも生活を立てたが、子女も追々成長して全く手放すほどになり、長女敏子は既に母を扶けるやうになつた。

明治二十二年に憲法發布せられ、二十三年には議會開設となり、政治的方面は實に目覺しい

發展ぶりである。かゝる際、五百子は再び事業を抛つて「君國の爲めに」との燃ゆる思ひは制し難く、つひに唐津に於ける公共事業、代議士選舉問題等の爲めに奔走する身となり、當時女流政客として大隈侯の知遇を得、箕浦勝人や島田三郎等の政界名士と往來して、當時異彩ある政治家としてその名は四海に響いた。

明治二十二年以來彼女の公共事業に貢献した跡を見るに、唐津海軍用地の拂下げ問題、松浦橋の架設、養蠶事業の發展策、鐵道布設、唐津灣開港問題等であつたが、就中唐津灣の開港問題は二十九年三月に五百子の活躍が最も其の效を奏して、つひに開港の運びとなり、延いて産業上の發展を見るやうになつた。而して人々の歡呼の聲。萬歳の叫びは五百子の身の上に集り、彼女の功勞は永久に稱へられるに至つた。最も開港式の時には、鍋島家より賜はつた上衣、小笠原家より贈られた下着、天野博士よりの襦袢、辰野博士より丸帶、加藤郡長より羽織、保科家より寄贈の金環等、これ等の名譽ある記念の品々を身につけて式場に列し、首賓の禮遇を受けたとのことである。

當時小笠原伯から五百子に贈られた

いそましまし君が勳に故郷も

萬代かけて榮えゆくらむ

の歌は彼女の勳功を永遠に傳ふるものであらう。

尙ほ、明治三十年に兄圓心師と共に韓國布教を思ひ立ち、翌三十一年同地に實業學校の設立に盡瘁して隣邦開發の公共事業の先驅者となり、三十二年には南清視察を企圖した。而して寒村僻地を踏査し婦女教育の状況を審にして歸つた。

三十三年北清事變に際して五百子は北清軍を慰問し、歸朝後軍人後援の爲めに婦人を糺合して愛國婦人會の創立に奔走し遂に、三十六年に閑院宮妃殿下を總裁に仰ぎ奉りて全國的にその人道的事業の精神を普及した。

茲に目出度く我國愛國婦人會の創立と、その大發展の基礎は確立して、現在百七十萬人餘りの會員を有するに至つたのである。四十一年二月六日「愛國婦人會」の一語を遺して彼女は六十二歳を以て逝いた。

乃木静子

静子夫人は薩摩の人で、その實家たる湯地家は、本來名門の家柄であつた。夫人の父定之の時、藩主の怒にふれたことがあつて、中途から醫者となり、随分微祿であつたが、夫人の兄定基、定監は兄弟共に勅選貴族院議員になられた程の立派な人であつた。静子夫人は七番目の末子であつたのでお七と稱して安政六年十一月二十七日の誕生である。

夫人は生れながらにして勝氣の性分であつた。常に男の兄弟達のすることを見做つてゐた。

明治元年十歳の時、植木といふ老人の許に入門して手習ひ、女大學などを學び、十二歳の時に、變則の女學校が鹿兒島に出來たので、そこに轉じた。十四歳の時には長兄定基が米國から歸朝して役人となつたので、湯地家も舉げて東京に轉居し、赤坂區和坂町に居を構えた。

静子夫人は十六歳の時に麹町女學校に入學して、正式の初等教育を受けることとなつた。普通婦人の教養として大切な裁縫、生花、禮式等の外に繪畫をも學んで、家庭的婦人としての豊かな趣味の涵養にも努めた。

明治十一年八月、時の陸軍中佐乃木希典と結婚した。乃木中佐は當時三十歳で歩兵第一聯隊長であつたが、密かに思ふところがあつて、結婚を勧められても一長州の女は嫌ひである。薩摩の女ならば嫁にせんこともない」など出鱈目をいつて、結婚に對しては殆んど無關心であつた。乃木大將の母は内々手を廻して薩摩の方面を探索してゐたが、恰度その當時、大將の副官であつた伊瀬地大尉が薩摩の人であつて、その親類湯地家に女があつたので、つひに伊瀬地大尉が仲立となることになつた。

愈々結婚式を舉げることになつて双方の親類も集り、花嫁も來たが、當の花婿である大將が見えない。つひに使を兵營に立てると、「今日は急用があるから片附次第に歸宅する」といつて待ちに待つても來ない。定刻より遅れること五時間、再三使者を立て、漸く歸宅したとのことである。大將は當時、家を外にして飲み廻り、往々脱線的行動が多く、人並はづれた道樂者であつたとのことであるから、母堂の心配も一通りでなく、せめて嫁を迎へたらその素行も直ることであらうと斯く取計つたのであつたが、そもく乃木大將が斯く放埒であつたことは、單に若氣の至りのみでなく、大將が明治十年の役の時、聯隊旗を敵に奪はれたそのことが非常に

口惜しく思つてゐたから胸中悶々の情に堪えずして、強ひてそれを酒盃遊興の間に排し去らんとしたものであらう。

乃木家は姑萬能の家庭であつたから、殊に親孝行の將軍には夫人などは全く眼中にはなかつた様である。それで、夫人が如何に戦々競々としてゐたかは、嘗てその姉馬場サダ子夫人に向つていはれた「私は嫁いだから三年目までといふものは、良人が跛であることも、それから片眼であることも知らずに、それに又少しも氣がつかずになりました」と申されたほどであつた。乃木大將は西南の役に負傷して、一方の足が少し跛であり、又片眼は生れながらにして見えなかつたとのことで、將軍は入れ眼をして居られたが、それ等のことも夫人は同居して三年間も知らなかつた位に厳格な家庭にて、大將との近づきも薄かつたのである。

何れにしても夫人が良人の愛に感じるではなしに、而かもその姑はがみくとして、氣むづかしやであつたから、その心配といふものは實に並大抵ではなかつた。結婚以來、尙ほ乃木大將の素行は懐まるところもなく、母堂の取計ひもその效がなかつた。それで母堂は靜子夫人が夫大將に對する仕打ちが宜敷ないからだ。又夫が靜子を好まぬからだといふやうな僻が起きて

來て、明治十五年に母堂は愈々靜子と同居することは好まないから別居させて貰ひたいと公然と申出ることになつたので、何事も母堂本位である大將は、別に考へる餘地もなくして、つひに別居せしむることになつた。それで夫人は明治十五年六月に勝典と保典の二幼兒を伴ひて別居したが、母堂はこれを機會に靜子夫人を離別してから、大將の氣に入る女を迎へやうと心かけたものであつたが、此の時大將は自分の命にかけても靜子を離別することは忍びないと公言したので、明治十六年十一月に漸く又本邸に歸ることになつた。

明治十九年十一月に大將は獨逸留學を命ぜられ、明治二十一年六月に歸朝したが、大將の生活はこの留學を一轉機として、殆んど別人のやうになり、年月の進むに従ひ益々道心堅固の武人となつて後には乃木聖人の域に達せられたのである。

大正元年九月十三日午後八時、乃木大將は六十四歳にして明治天皇に殉じ、夫人は五十四歳にて夫に殉じたのである。母堂は大將が臺灣總督中、彼地にて没したが、晩年の夫婦は誠に清き生涯であつた。靜子夫人は所謂「忍べる者は幸なり」といふ言葉の通り、誠によく永い生涯を忍び通した人である。夫人は「女大學」の教訓を、その文字通りに守つて來た人であると觀

ることも出来る。又乃木大將は決して生れながらの乃木大將ではなかつたといふことは前に述べたことでも些かわかることと思ふが、自らの意志を以て出来るだけ作り變へんとした修養の結果であつた。大將が靜子賢婦人の内助に俟つことの偉大であつたと同時に、夫人も或る程度に於て將軍の感化を受けてゐた。

元來、鹿兒島は良妻賢母の生産地ともいはれて、鹿兒島婦人は通じて辛抱強い。それに乃木夫人は嚴格な姑と、乃木將軍によつて益々又堅實な訓練を受けたのであるから、自然にかく偉大なる婦人となられたのである。

大正元年九月十三日午後八時、夫婦相對して、共に明治大帝の御後を追ふことになつたが、大將の方から決して勧められたのではなく、夫人自ら進んで斯く自害されたのであることは明白である。嘗て、大正元年八月二十日頃、將軍は夫人と話してをられたことがある其の時、夫人は將軍に對して「陛下におかせられても、萬一のことはございますから、宅の跡目のことなども、しつかりしておいて頂かなくては——」と言はれたことに對して、將軍は、最早當時死を決してをられたので「何も心配することはない。しかし、心配になることがあつたら、御身も

己と共にあの世に旅立つてはどうか」と冗談交りに言はれた。夫人は笑つて「いやです。これから芝居も觀、食べたいものもどつさり食べたいと考へてゐるのですから」と言はれたさうである。然しそれは一時の冗談であつて、遂に夫人も一緒に逝くことになつたが、大將の覺悟されたのを感知した時には、夫人も決心されたのであらう。

自害された時には、夫人は、椗色麻の小桂を着け、柑子色の袴を穿ち、白色の麻衣、白木綿襦袢二枚を着して白縮緬の帯を結び、白足袋を穿ちて、小机に北方の斜に、大將と對して端座し、懐劍を以て胸部を小桂の上より貫き、白鞘を左側におき、頭部を正しく大將の方に向けて俯伏し、絶息してをられた。その間些かの取紊れたところがなかつたとのことである。

歴史的に觀たる日本女性（終り）

昭和十年六月十五日 印刷
昭和十年六月二十日 發行



10.6.17

歴史のこころに
日本女性
定價金壹圓貳拾錢

著者 西村龍徹

發行者 北村常三
東京市四谷區新宿一丁目八十八番地

印刷者 矢澤文次郎
東京市神田區小川町二丁目十二

發行所

東京市四谷區新宿一ノ八八番地
振替東京二七一三〇番

三友社

電話四谷三二二一

＝ 書考參驗受及習自 ＝

版再	版八十	版再	版一十二	版六十	版七十四
本多 百雄著 代數學問題の解き方	石塚好忠著 漢文の解釋と文法	文學士青木武助著 中等日本史	文學士橋本辰彦著 趣味の東洋歴史	文學士橋本辰彦著 趣味の西洋歴史	文學士橋本辰彦著 趣味の日本歴史
四六判 定價一・二〇	四六判 定價一・二〇	四六判 定價一・二〇	四六判 定價一・二〇	四六判 定價一・二〇	四六判 定價一・二〇
○本書は、代數學の重要問題を、平易に解説し、その解法を詳しく述べ、練習問題も豊富に附している。○本書は、漢文の文法と解釋を、平易に解説し、その用法を詳しく述べ、練習問題も豊富に附している。○本書は、中等日本史の要領を、平易に解説し、その歴史的背景を詳しく述べ、練習問題も豊富に附している。○本書は、東洋歴史の要領を、平易に解説し、その文化の発展を詳しく述べ、練習問題も豊富に附している。○本書は、西洋歴史の要領を、平易に解説し、その社会の発展を詳しく述べ、練習問題も豊富に附している。○本書は、日本歴史の要領を、平易に解説し、その文化の発展を詳しく述べ、練習問題も豊富に附している。					
東京市口座 番〇三一七二	行發社友三			東京市四区 番八八ノ一宿新	

＝ 書考參驗受及習自 ＝

版三	版七十二	版重	刊新最	版重	版五十五
中等教育研究聯盟編 現代世界の地理	角田政治著 趣味の世界地理	橋本辰彦著 新しい日本地理	三友社編輯部編 近畿の史蹟と藝術	中等教育研究聯盟編 現代日本地理	角田政治・橋本辰彦共著 改訂中等趣味の日本地理
新四判 定價一・二〇	四六判 定價一・二〇	四六判 定價一・二〇	一三六判 定價一・二〇	新四判 定價一・二〇	四六判 定價一・二〇
○本書は、現代世界の地理を、平易に解説し、その文化の発展を詳しく述べ、練習問題も豊富に附している。○本書は、趣味の世界地理の要領を、平易に解説し、その文化の発展を詳しく述べ、練習問題も豊富に附している。○本書は、新しい日本地理の要領を、平易に解説し、その文化の発展を詳しく述べ、練習問題も豊富に附している。○本書は、近畿の史蹟と藝術の要領を、平易に解説し、その文化の発展を詳しく述べ、練習問題も豊富に附している。○本書は、現代日本地理の要領を、平易に解説し、その文化の発展を詳しく述べ、練習問題も豊富に附している。○本書は、改訂中等趣味の日本地理の要領を、平易に解説し、その文化の発展を詳しく述べ、練習問題も豊富に附している。					
東京市口座 番〇三一七二	行發社友三			東京市四区 番八八ノ一宿新	

＝ 書考參驗受及習自 ＝

版再八	版再	版再	版再	版再	版再
瀬尾 徹著 分り易い中等一二年の代數 力のつく中等三四年の代數	瀬尾 徹著 分り易い中等三四年の代數 力のつく中等三四年の代數	實力 受驗界の代數 理學博士 小野田忠監修 古田兵衛著	實力 受驗界の代數 理學博士 小野田忠監修 古田兵衛著	吉木利光著 本位 受驗界の化學	中等教育研究聯盟編 自習用 中等三四年の化學
送料 四六判洋裝 定價 一・五〇 一・二〇	送料 四六判洋裝 定價 一・五〇 一・二〇	送料 四六判洋裝 定價 一・五〇 一・二〇	送料 四六判洋裝 定價 一・五〇 一・二〇	送料 四六判洋裝 定價 一・五〇 一・二〇	送料 四六判洋裝 定價 一・五〇 一・二〇
●初めて学ぶ人の爲めに最も分り易く平易の文章で講義したもので、小學校卒業程度の方ならば誰れでも本書を讀んで居る内に知らず知らず代數を覺えることが出来る書である。	●前著「一二年の代數」の續刊で一層及徹根以下級數迄を收めてある。説明は懇切で理論も正しく練習問題も多く載せてあるから自習及受驗者には此の上もないよい手引となる。	●最初に代數式全般に亘つて述べ以下方程式、比例、級數、對數、不等式の順を追つて最も分り易く説明し、最近五ヶ年間の入學試験問題を適宜に配當し、各問題につき一々取扱方と解答を附してある。	●物理教授要目に準據し、講義は簡明に要點を掲げ、各章末に最近十一年間の入學試験問題を網羅して挿圖につき其の解答を附してある。	●最近二十年間の高等專門學校及事檢入學試験問題を分類整理し、問題の解き方、解法、解答の同時に出る様に書いたものである。	●山學三四年程度の要目に準據して内容は講義と問題とより成つて居る。講義は簡明瞭にして二、三年間の入學試験問題を各章に排列して其の解答をしてある。

東京市四谷區 三友社發行 振替口座東京 番〇三一七二

＝ 書考參驗受及習自 ＝

版重	版重	版重	版重	版重	版重
荒井忠市郎編 ミツキー・マウス 音楽家のフの巻 飛行家のの巻 開拓者のの巻 怪物ゴリラの巻	長倉博編 師範學校各科準備書	受驗法曹會編輯部編 最新普通文官模範答案集	佐々木幹夫著 小教員受驗準備の指導	高橋鐵也著 女子獨學受驗者の爲に	中村ヨシ先生校閱 裁縫研究會著 小學校裁縫教科正教員受驗參考 教育大意と裁縫教授法 附録 裁縫教科檢定問題集
送料 四六判洋裝 定價 一・五〇 一・二〇	送料 四六判洋裝 定價 一・五〇 一・二〇	送料 四六判洋裝 定價 一・五〇 一・二〇	送料 四六判洋裝 定價 一・五〇 一・二〇	送料 四六判洋裝 定價 一・五〇 一・二〇	送料 四六判洋裝 定價 一・五〇 一・二〇
●英語の復讀本としてトリーキーで諸君と御馴染みの深いミツキー・マウス君を容易なる英語で書いたものである。英語を面白く學ぶ爲にミツキー・マウスを是非一讀せられたい。	●本書は高等小學校教科書及び各府縣出題の問題を各學科(國語、算術、歴史、地理、理科)について編者多年の経験から判出理科の知識の整理に特殊な方法を用いて自習及復習方法を講じたものである。	●憲法、行政法、民法、刑法、經濟、及國語、漢文、地理、歴史、算術等の問題大正十二年より最近迄の全部に亘つて模範的解答を示し、且つ口述試験普通而試験合判任官給表試験公告受驗者心得等を添ふ。	●獨學教育志望者の手引として、受驗案内、各科準備學習法、受驗法の要訣、合格體験記、各科試験問題、各科模範答案等親切にもれなく叙述してある。小學校教員たらんとする諸君は先づ一讀せられたい。	●獨學女性の爲に獨學を以て小學校教員定、産婆、看護婦、専任に及第するには如何なる方法によるべきかの事柄については懇篤に丁寧ながらも要領よく叙述されたものである。	●理論方面の研究で最も難關とし困難視される所の教育大意と裁縫教授法につき系統的に順序よく配列して各章につき各府縣の試験問題集が添へてある。附録として

東京市四谷區 三友社發行 振替口座東京 番〇三一七二

＝ 書 考 參 育 教 ＝

版 五	刊新最	版 重	版 重	版 重	版 重
裁縫研究會編 訂正増補 裁縫教授法精義 裁縫中心 問題中心 理論・實地・口述試験問題集	三友社編輯部編 教育大意精義 文檢中心 問題中心	浦木金太郎著 國民道德要領 文檢中心 問題中心	石川寅治校閲・山崎隆一郎著 圖畫教育の研究と指導 文檢試験問題集	文學士 橋本辰彦著 最新動態滿洲・支那地理 別名 小學校に於ける公民教材と其の關係法令	平川一郎著 公民科學習便覽 下上
四六判洋裝 定價二・五〇 送料一・二〇	四六判洋裝 定價二・〇〇 送料一・二〇	四六判洋裝 定價一・〇〇 送料一・二〇	四六判洋裝 定價二・八〇 送料一・二〇	四六判洋裝 定價二・五〇 送料一・二〇	四六判洋裝 定價一・五〇 送料一・二〇
裁縫教授法精義は系統的な参考書で、裁縫の形式は更なる問題中心にして、問題の全部と將來の秩序を整然とした解説が與へてある。	教育大意精義は、及最近教育思潮に於ける、心理的・教育的・及非頭腦的の選り分けられたる問題の流暢な筆を以て最も易く説明してある。	國民道德要領は、最近の試験問題の趨勢を把握し、且つその研究の模範として、系統的に配列したものである。	圖畫教育の研究と指導は、圖畫科の研究の材料として、且つその研究の模範として、系統的に配列したものである。	最新動態滿洲・支那地理は、地理教育の発展に於ける、且つその研究の模範として、系統的に配列したものである。	公民科學習便覽は、公民科の習得に於ける、且つその研究の模範として、系統的に配列したものである。

京東座口替振 行發社友三 區谷四市京東 番〇三一七二 八八ノ一宿新

＝ 書 考 參 驗 受 檢 專 及 檢 小 ＝

刊新最	版 五	版 八	版 八	版 重	版 重
野間瑞夫著 教育史と論理學 小檢受用 問題解答式	宮野輔著 教育大意問題精解 專科正教員 檢定受用 試験試験によく出る教育上の術語の解説	宮野輔著 教育科精説 專正・保姆 檢定受用	濱野宮之助著 修身科精説 濱野宮之助著 小學教員及 專檢受用	濱野宮之助著 法制經濟精説 中等師範自習用 小學教員檢定用	谷島源十郎著 農業科精説 受驗中心 問題中心
四六判洋裝 定價一・五〇 送料一・二〇	四六判洋裝 定價一・五〇 送料一・二〇	四六判洋裝 定價一・七〇 送料一・二〇	四六判洋裝 定價一・八〇 送料一・二〇	四六判洋裝 定價一・六〇 送料一・二〇	四六判洋裝 定價三・五〇 送料一・四〇
教育史と論理學は、教育史の中心問題について、各府縣の最大難問たる教育史の論議を、且つその研究の模範として、系統的に配列したものである。	教育大意問題精解は、專科正教員檢定受用の試験によく出る教育上の術語の解説を、且つその研究の模範として、系統的に配列したものである。	教育科精説は、教育科の習得に於ける、且つその研究の模範として、系統的に配列したものである。	修身科精説は、修身科の習得に於ける、且つその研究の模範として、系統的に配列したものである。	法制經濟精説は、法制經濟の習得に於ける、且つその研究の模範として、系統的に配列したものである。	農業科精説は、農業科の習得に於ける、且つその研究の模範として、系統的に配列したものである。

京東座口替振 行發社友三 區谷四市京東 番〇三一七二 八八ノ一宿新

上村一仁著 (學校・家庭に於ける性教育の必讀書)

思春期男女の性教育

四六判洋装二五〇頁
定價金壹圓五十錢
送料金十錢

性のめざめを明るく認識せよ！性の憂鬱を明るく解消せよ！！

青少年の性に關する指導重要にして又困難なる問題は無い。或人は無關心な態度でこのやうな問題をさげ、或は思慮なく眉を擧める様な言葉を弄し、又或は科學的知識に教ふれば可なりと云い、或は教ふべく導くべき問題とは知りつゝ、その方法を知らず、唯手を拱いて傍觀する。青少年教育の任は、育指導に名を借りて極めて挑發的な書物を世に公けにして、恥ぢない者すらある。青少年教育の任は、あり科學的な知識と宗教的信念とを持つて著者が青少年の良き友たり且指導者として、平明に親切に、理智と情操とを持つてこの問題を著述したのである。教育者、父兄は勿論直接の悩みを持つ青少年が本書の示す指道針に従ふならば青年日本建設の目捷の近きにありと信するものである。

次目

第一章	性慾に就ての明るい理解	第二章	青春時代の明るい理解	第三章	情愛行爲の考察		
第四章	自清行爲に就て	第五章	性問題の複雑な原因	第六章	男女の相異	第七章	婚約者
第八章	婚約時代を如何に過すか	第九章	性に關する傳説と科學	第十章	性と宗教		

【多溪會館物調査部批評】
重要にしてしかも難事である性教育に關して、學理と實情とより眞剣に其善導を叫び、卒直にしてしかも穩健に説いた點が本書の生命である。青年子女の教育の任に當るものは其の學校たると家庭たるを問はず是によつて慎重に研究したならば裨益する所大なるものがあるであらう。

681
38

東京
三友社
發行